

ルールメイカー育成プロジェクト 2021

認定特定非営利活動法人カタリバ

2022年2月28日



RULE MAKING

未来は、つくれる。

KATARIBA

Shape the Future

本事業のサマリ

報告書本編

1. 本事業の背景と目的
2. 実施体制・実証フィールド (実証自治体・実証校)
3. 実施内容
4. 本実証で得られた成果
5. 調査研究による効果検証
6. まとめ・今後に向けた示唆

概要

事業者	認定特定非営利活動法人カタリバ
実証フィールド	泉大津市立小津中学校（大阪府、公立） 姉崎高等学校（千葉県、公立） 福井県教育庁等 全国11校2自治体
時期	2021年
背景	社会は複雑化する中で、予測不能な未来を生き抜く力（課題発見力/合意形成力）が全ての若者に求められている。
目的	校則・ルールに対して生徒が主体となり、先生・保護者などの関係者との対話を重ね、納得解をつくることを通して、課題発見・合意形成・意思決定をする力（市民性”シティズンシップ”）を高めていく。
内容	①プログラム開発/先進事例づくり ②自治体伴走支援モデル開発 ③学校自走支援モデル開発 ④ムーブメントづくり ⑤交流支援

成果と展望

成果	①プログラム開発/先進事例作り ・各校での多様な実践の創出 ・本質的な取り組みになるためのキーポイントの特定 ②自治体伴走支援モデル開発 ・導主事モデル/地元人材活用モデル 異なる体制での自律的な取り組み ・指導主事モデル/地元人材活用モデル それぞれの強みと課題の特定 ・拡大に向けた打ち手の設定 ③学校自走支援モデル開発 ・ルールメイキングの新規立ち上げ校に求められる支援内容の特定 ・上記を支援するパートナー制度の開発 ④ムーブメントづくり ・対話的ルールメイキングの認知拡大 ・実践者の立場からの情報発信の増加 ・ルールメイキング宣言の策定 ⑤交流支援 ・他校との情報交換を通じたルールメイキングの促進 ・実践者同士の主体的な交流機会への発展
----	---

展望	・ルールメイキングの展開に向けた今後の方向性
----	------------------------

1. 事業概要

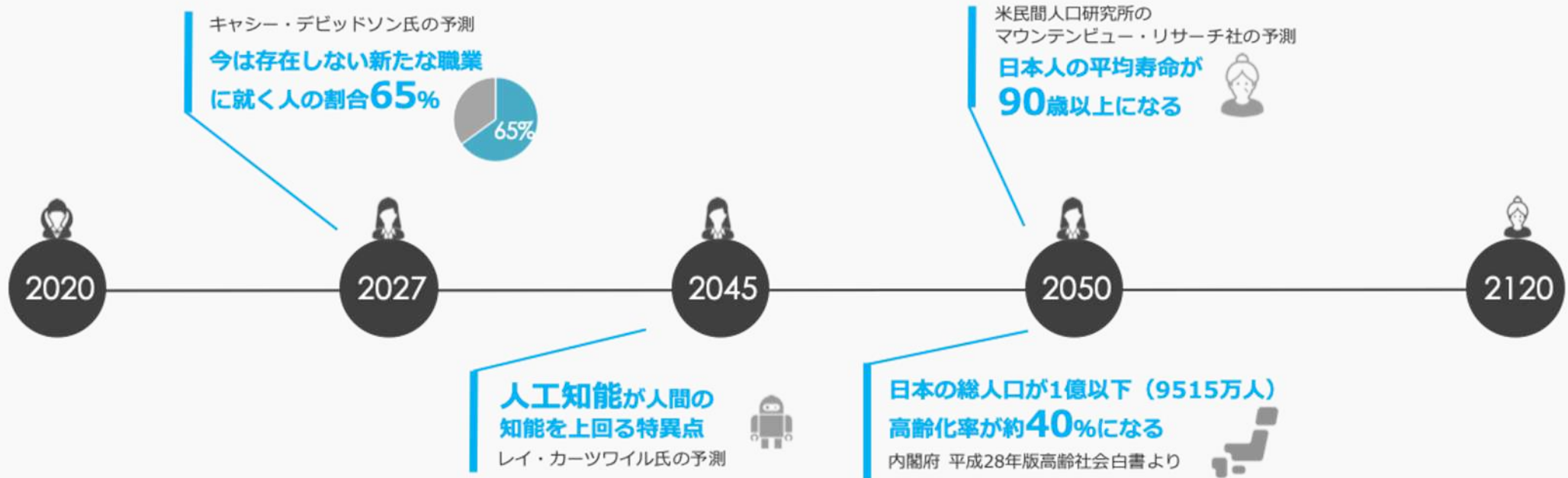
KATARiBA
Shape the Future

1.背景と目的

予測不能な未来を生き抜く力が全ての若者に必要

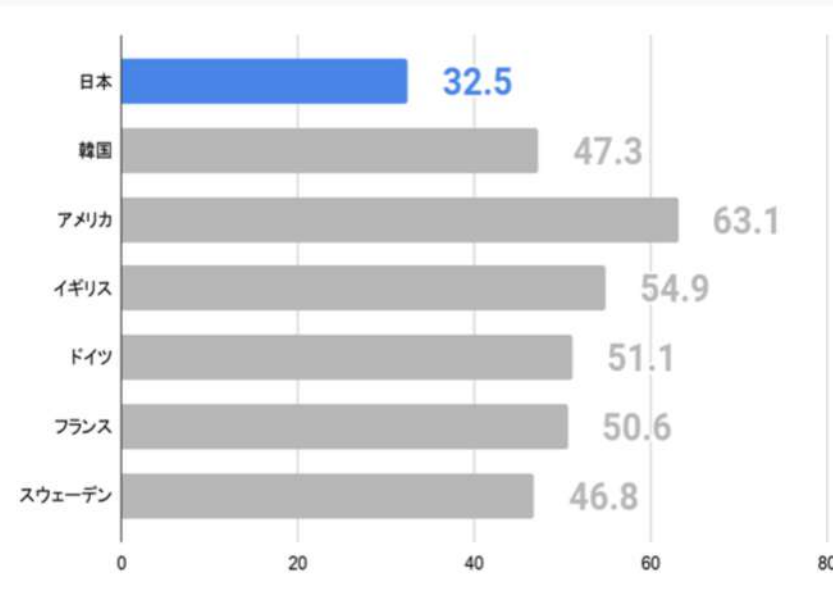
社会は複雑化し、若者を取り巻く環境はこれまでの当たり前が通用しないほど急速に変化しています。予測不能な未来を生き抜く力（課題発見力/合意形成力）が全ての若者に求められています。

➡ 予測不能な未来



現代の日本の子ども達の特徴として「社会参加への効力感の低さ」が指摘されるようになってきました。「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（令和元年 内閣府 調査）」によると、同時に実施した韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンの若者の回答と比較してもっとも低い実態にあったほか、2013年度の調査からもさらに低下しています。

私の参加により、変えてほしい社会現象が
少し変えられるかもしれない



出典：令和元年 内閣府 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査

学校活動への参画が、子どもたちの市民性を育むという研究結果が海外では蓄積されています。

- 海外の研究結果 -

- ・ 「生徒会（役員）活動への参加経験」
➡ 成人後の投票や市民参加を促す効果
(Verba et al. 1995, Homana 2018)
- ・ 「学校の意思決定への参加の自信」
➡ 政治参加の意欲に影響（国際比較調査）
(Torney-Purta et al. 2001)
- ・ 「民主的な学校風土」
(学級での意見表明の奨励や
学校の意思決定への参加など)
「教員の公平性」
(校則の公平性を含む)
➡ 市民参加への意欲に影響
(Lenzi et al. 2014)

1.背景と目的

多種多様な学校に対応できるルールメイキングプログラムを開発し、ムーブメントを起こすことで、
全国の中高生の課題発見・合意形成・意思決定をする力（市民性”シティズンシップ”）を育む

本プロジェクトの核は、校則やルールに対して生徒が主体となり、先生・保護者などの関係者との対話を重ね納得解をつくること（ルールメイキング）を通して、生徒の課題発見・合意形成・意思決定をする力（市民性”シティズンシップ”）を育むプロジェクト型学習（PBL）プログラムです。未来の教室のビジョンである『児童生徒一人一人の興味・関心、ワクワクを核に、「探究」「プロジェクト型学習（PBL）に取り組む』や『学校と社会の連携（企業人の教育参画促進）』『教育環境の整備』の実現に対しては、生徒に身近で興味を持ちやすい校則をテーマにしたPBLの実施や、企業人の兼業・副業参画、校則改定による生徒教員間の関係性の変化による教育環境の向上などの部分で親和性が高いです。

最終的に達成したい状態



私立・公立・都会・地方・小規模・大規模など
多種多様な学校に対応できる
プログラム・仕組みの開発・効果検証



効果的な広報・PR活動を行い、
ルールメイキングムーブメントを起こすことで、
一人でも多くの生徒にルールメイキングを届ける



日本全国の中学校高校がルールメイキングに取り組み、
学校の魅力化、教員の意識改革を行うと共に、
生徒たちの「市民性”シティズンシップ”」を育む

2. 実証体制・実証フィールド

KATARiBA
Shape the Future

2.実施体制・実証フィールド

実施体制

■事業受託者：認定特定非営利活動法人カタリバ

- ・ 統括責任者 ：今村久美（代表理事）
- ・ 執行責任者 ：菅野祐太
- ・ 渉外担当 ：山本晃史
- ・ 事務局 ：藤本雅衣子・古野香織・起塚拓志・阿部愛里

■監修/アドバイザー：

- ・ 熊本大学 苫野一徳 氏（プロジェクト全体監修・アドバイザーを担当）
- ・ 慶應義塾大学 若新雄純 氏（自治体モデルアドバイザー）
- ・ 古瀬ワークショップデザイン事務所 古瀬正也 氏
（コーディネーターアドバイザーを担当）
- ・ 大阪国際大学短期大学部 古田雄一氏(効果検証を担当)
- ・ 株式会社サステナ 前北美弥子氏(PR企画アドバイザーを担当)

実施体制

■ルールメイキングコーディネーター：

（各校のコーディネートを担当）

- ・ 公募により採用
- ・ 実証事業校各校に1～2名
- ・ 属性
メディア関係者、ユースセンター職員、教育コンサルタント、
教育寮スタッフ、人材系民間企業、実証事業校OB 等

■研究チーム（詳細は【5. 調査研究による効果検証】参照）

2.実施体制・実証フィールド

実証フィールド（学校）

- ①泉大津市立小津中学校
・ 所在地： 大阪府
- ②大垣市立東中学校
・ 所在地： 岐阜県
- ③ 四條畷学園中学校
・ 所在地： 大阪府
- ④ドルトン東京学園中等部
・ 所在地： 東京都
- ⑤山形県立遊佐高等学校
・ 所在地： 山形県
- ⑥栃木県立足利清風高等学校
・ 所在地： 栃木県
- ⑦ 千葉県立姉崎高等学校
・ 所在地： 千葉県
- ⑧駒場学園高等学校
・ 所在地： 東京都
- ⑨自由学園中等科・高等科
・ 所在地： 東京都
- ⑩大阪夕陽丘学園高等学校
・ 所在地： 大阪府
- ⑪ノートルダム女学院中学高等学校
・ 所在地： 京都府

実証フィールド（自治体）

- ①福井県教育委員庁
・ 所在地： 福井県
- ②広島県教育委員会
・ 所在地： 広島県

3. 実施内容

KATARiBA
Shape the Future

3.実施内容

事業遂行のために行う5つの施策

	狙い	取組み内容（実際の取り組み）
①プログラム開発/先進事例作り （個別伴走支援）	多様な学校に対応できるプログラム開発 <ul style="list-style-type: none"> ・ 私立・公立・都会・地方・小規模・大規模など、多種多様な学校でプログラムを実施することで、どのような学校にも対応できるプログラムを完成させる。 	11の実証事業校に個別伴走支援 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教材提供 ・ 教員研修の実施 ・ コーディネーター派遣/育成 <ul style="list-style-type: none"> ■ プロジェクト推進 ■ 校則検討WSの実施
②自治体伴走支援モデル開発 （県・市区町村）	次年度以降の自然普及プランの開発 <ul style="list-style-type: none"> ・ 単年で直接支援を終え、翌年からは自走（自然普及）できるモデルの開発する。 	県・市・町の教育委員会に対してルールメイキングノウハウの提供 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教材提供 ・ 各種ノウハウ提供研修 ・ 自治体間交流の実施
③学校自走支援モデル開発	スケール可能な非ハンズオン支援の開発 <ul style="list-style-type: none"> ・ 個別伴走しない支援モデルを開発する。 	間接支援でも効果をあげられる仕組み作り <ul style="list-style-type: none"> ・ パートナー制度の設置・拡充 <ul style="list-style-type: none"> ■ 教材提供 ■ 教員研修の見学 ■ 講師派遣 ■ 教員コミュニティの開設・運用 ■ 相談チャットの開設・運用
④ムーブメントづくり	ルールメイキングの機運情勢 <ul style="list-style-type: none"> ・ ルールメイキングに興味のある教員や個人を増やす ・ 「ブラック校則の是正」にとどまらない、「対話的なルールメイキング」の理念浸透・発信 	「対話を通じたルールメイキング」の発信 <ul style="list-style-type: none"> ・ 各種SNSを活用した情報発信 ・ HPの整備・拡充 ・ 各種メディア掲載 ・ #みらいの校則コンテスト開催 ・ 中高生発信ゼミの運営 ・ 「ルールメイキング宣言」策定 ・ ルールメイキングフォーラム開催
⑤交流支援	学び合う力の養成 <ul style="list-style-type: none"> ・ 学びとは、大人から教えてもらうことでのみ生まれるのではなく、同世代の友人から得られることを知る ・ 他校生徒の考えを聞くことで、多様な考えを持てるようにする 	交流会の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒交流会の実施 ・ ルールメイキングシンポジウムの実施 ・ 中高生メンバーのPJ参画

3.実施内容

①プログラム開発/先進事例作り：教材提供/教員研修の実施

R3年度 実証事業校

1	泉大津市立小津中学校	大阪府	公立中
2	大垣市立東中学校	岐阜県	公立中
3	四條畷学園中学校	大阪府	私立中
4	ドルトン東京学園中等部	東京都	私立中
5	山形県立遊佐高等学校	山形県	公立高
6	栃木県立足利清風高等学校	栃木県	公立高
7	千葉県立姉崎高等学校	千葉県	公立高
8	駒場学園高等学校	東京都	私立高
9	自由学園中等科・高等科	東京都	私立中高
10	大阪夕陽丘学園高等学校	大阪府	私立高
11	ノートルダム女学院中学高等学校	京都府	私立中高

昨年度開発したプログラムを元に、多種多様な学校に対応できるルールメイキングプログラムを開発しました。本プロジェクトの実証事業校募集に応募・採用された、私立、公立、都会、地方、大規模、小規模など、様々な特徴を持った11の新規実証事業校にてプログラムを実施することで、多種多様な学校に対応できるルールメイキングプログラムとして完成させることを目指し、ルールメイキングコーディネーターを派遣する個別伴走支援を行いました。



▲ハンドブックや解説動画、ワークショップ資料（タイムラインやスライド）をルールメイキング教材として実証事業校に提供しました。



◀実証事業校でのルールメイキング推進を担う担当教員を対象として研修会を全5回開催しました。各学校の進捗共有や事務局からインプットの時間を持ち、実証事業校同士がつながり、学び合う場として機能していました。

3.実施内容

①プログラム開発/先進事例作り：ルールメイキングコーディネーター採用・育成

学校の先生や生徒の伴走を行い、学校と社会をつなぐ「ルールメイキングコーディネーター」を採用・育成しました。コーディネーターは11の新規実証事業校をそれぞれ1校担当し、対面・オンラインどちらの機会も持ちながら生徒とのワークショップや教員との打ち合わせ、計画の修正、進行管理を行い、PJ推進の潤滑油としての機能を果たしました。人材は現役のビジネスマンや教育関係者を兼業副業として採用し、学校に外部から新しい風を送り込みました。



▲ルールメイキングコーディネーターとしてのマインド・スキルセットや、学校文化を学ぶ研修を行いました。またコーディネーターは事務局と定期的にミーティングを実施し、プロジェクトの進捗確認や進め方の悩み解消などを行いました。



▲校則見直しに関するワークショップや対話の場づくりに取り組むコーディネーター

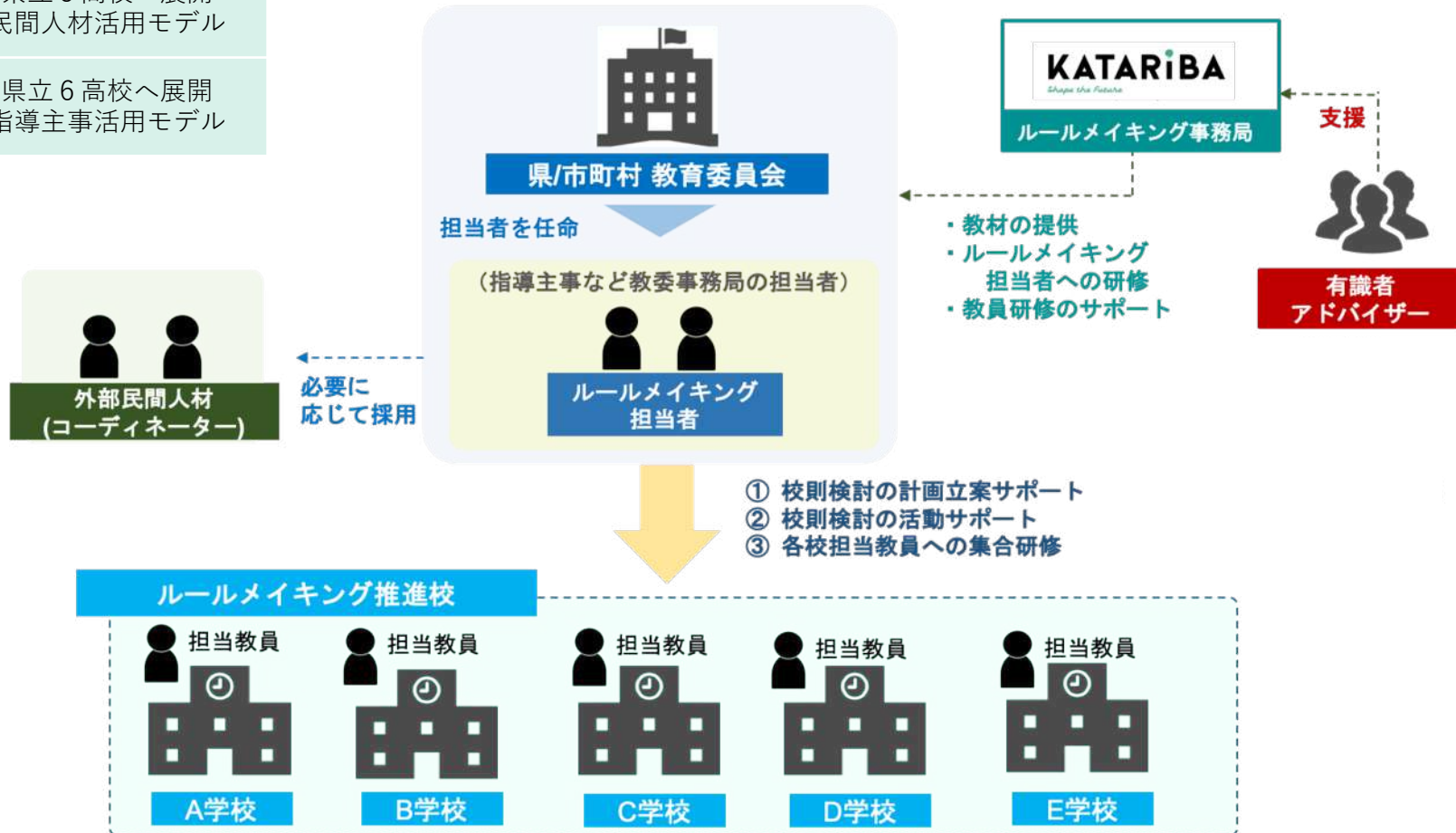
3.実施内容

②自治体伴走支援モデル開発

自治体の教育委員会職員にノウハウを提供することで、効率的にルールメイキングを広めるモデルを開発しました。複数の自治体で異なる体制をつくりながら、自治体内での自律的な取り組みへの発展に向けた知見を生み出しました。

連携自治体		
1	福井県教育庁	県立5高校へ展開 民間人材活用モデル
2	広島県教育委員会	県立6高校へ展開 指導主事活用モデル

- 自治体教育委員会導入の基本モデル -



3.実施内容

③学校自走支援モデル開発：パートナー制度

校則見直しに取り組みたい先生(個人)・学校・自治体・学校関係者の方へ対して、ルールメイキングの導入支援サポート（教材提供・研修）を提供するパートナー校を募集し、ルールメイキングの自走が可能となるよう、非ハンズオン支援を行いました。個別伴走しない支援モデルを開発することで、次年度以降の自走モデルの一つとなることを目指しました。

教材・研修機会の提供

ルールメイキングハンドブックを提供し、学校状況に合わせたワークショップをつくる支援を行いました。実証事業校担当教員研修にも参加していただき(任意)、実践事例を知る機会を設けました。

生徒交流会への招待

9月、12月に実施された生徒交流会に、パートナーの教員・生徒を招待しました。パートナーの生徒たちは、実証事業校の生徒から対話の実践アイデアを学び各校に持ち帰るなど、学びが促進される様子が見受けられました。

教員コミュニティ、事務局相談チャットの運用

コミュニケーションツール「slack」を使用し、パートナーの教員が参加できるコミュニティの運用を開始しました。事務局とのチャット相談も可能のため、各校のルールメイキング実践を検討する際に活用されています。



▲実証事業校の担当教員研修に参加するなど、実証事業校の事例を持ち帰る機会を設けました。イベント等では聞くことのできない、担当教員の伴走の様子を知る場となっています。



◀パートナーの一部では、ルールメイキングハンドブックや実証事業校の実践事例を参考に、生徒会生徒と顧問が自走的に「意見交換会」が実現しました。

3.実施内容

④ムーブメントづくり：各種SNS・公式サイトを活用した情報発信

ルールメイキングの認知拡大および情報発信を行うためTwitter、YouTube、note等のSNSアカウントの開設・運用を実施。さらに公式サイトのリニューアルやSEO対策により、検索流入・SNS流入を獲得を図りました。



公式Twitter

2021年9月にアカウントを開設し、現在までに125フォロワーを獲得。イベント告知、メディア掲載や各種お知らせ、先生・生徒とのSNS上でのリレーションを図っています。



公式YouTube

2021年7月にアカウントを開設し、現在までにチャンネル登録者数167人を獲得。各種イベントのオンライン配信やアーカイブを記録しています。公開動画ばかりでなく限定公開の勉強会動画などがあり、パートナーや実証校の学生がルールメイキングを深めるために利用しています。



公式note

2021年8月から「note pro」へ契約を切り替え、note内での投稿コンテストキャンペーンなども図り、現在までに350フォロワーを獲得。イベント告知、お知らせ、各種情報発信を行う媒体として運用しています。また実証事業校にもアカウント開設を依頼し、ルールメイキングの情報発信の強化に勤めています。

3.実施内容

④ムーブメントづくり：各種メディア掲載

ルールメイキングの認知施策として新聞、WEBメディア、TV、ラジオ等のメディアへの取材・掲載を目的とした広報活動を行いました。プレスリリース発信や各種メディアへの告知活動に取り組んできました。

PressRelease／校則見直しに取り組む全国の12校がnoteアカウント開設 NPOカタリバとnoteが連携し、生徒たちの発信を応援

2021.6.22



PressRelease／11月20日、校則見直しに取り組む全国の中高生や教師が「わたしたちのルールメイキング」について語るオンラインイベント開催

2021.11.20



校則見直しにNPOや弁護士会など「学校外の第三者」が加わる新しい動き 生徒主体の対話へ「人権侵害は許さない」



各種お知らせやイベント告知のプレスリリース発信

カタリバWEBサイトにて報道機関関係者に向け、各種お知らせやイベントのプレスリリース発信を行い、メディア誘致を積極的に実施してきました。

新聞・TV・雑誌・WEBなど幅広くメディア取材に対応

プレスリリース発信の効果や新聞等での発信を受けて、地方TV局から取材依頼がくるなどの波及効果で、全国メディアだけでなく地方メディアの取材獲得の強化を行ってきました。

3.実施内容

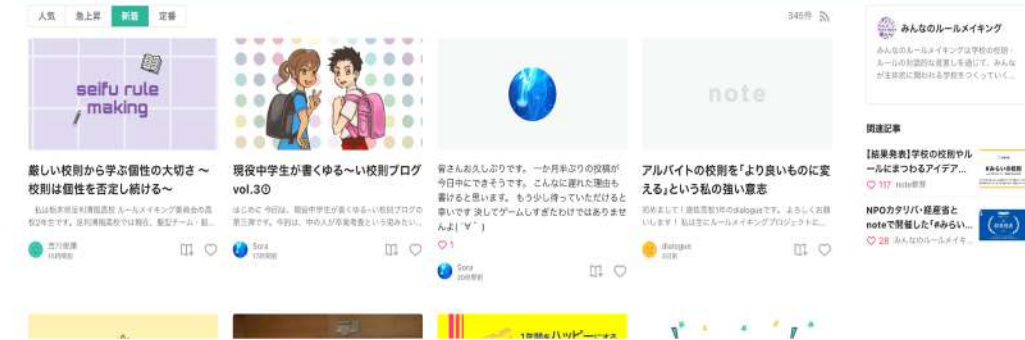
④ムーブメントづくり：「note」と連携した「#みらいの校則」投稿コンテスト

note株式会社が運営するメディアプラットフォーム「note」にて2021年9月～12月までの約3ヶ月間にわたり「#みらいの校則」ハッシュタグキャンペーンを開催しました。校則にまつわる考え・アイデアを広く募集し、中高生・大学生・社会人など年代に関係なく多くの発信・ルールメイキングへの注目を集めました。



【結果発表】学校の校則やルールにまつわるアイデアやレポートを、お題企画「#みらいの校則」で募集します。

♡ 117



校則は「まもる」存在から「つくる」存在に変えられる。ぼくが「つくる」ことで対話を起こしたいワケ。

♡ 218



たとえ校則が変わっても、わたしがズボンを履くことはありません。

♡ 518

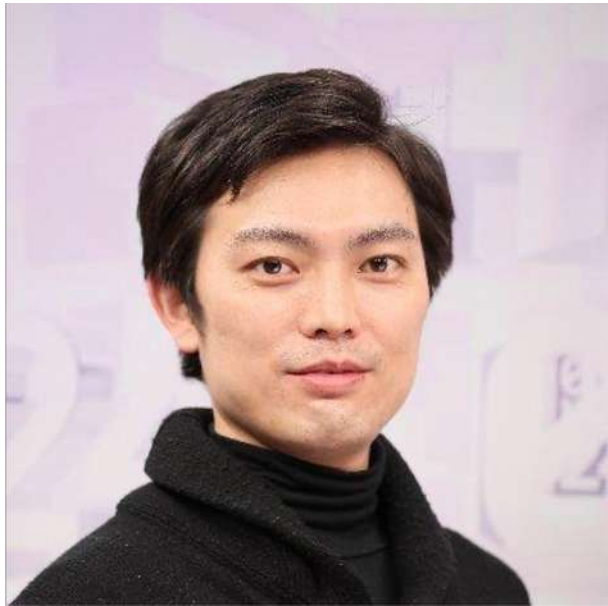
▲note社と協力し告知記事を発信

▲note社と協力し告知記事を発信

3.実施内容

ムーブメントづくり：ルールメイカーの声を届ける「中高生情報発信ゼミ」の開催

中高生情報発信ゼミはルールメイキングに取り組む中学・高校の生徒が自らの学校のルールメイキング活動を対外的に伝えるために、情報発信の伴走サポートを行う取り組みです。日本テレビ報道局記者・アナウンサーの加藤聡さんをゼミ長にお迎えし、実証事業校を中心とした12校30名の有志の中高生が所属し、月1本の記事を半年間継続して執筆しています。



▲日本テレビ報道局記者・アナウンサー
加藤聡さん

【経歴】

- 2008年4月 アナウンサーとして日本テレビに入社
- 2010年7月～ 「news every.」リポーター
- 2015年1月～ 政治部にて記者・ディレクター
- 2019年8月～ ネット番組「the SOCIAL」プロデューサー
- 2020年4月～ インターネット向けニュース配信の担当プロデューサーとしてSNSを活用した情報発信全般に従事。



▲ZOOMを利用して月1度ゼミに参加する中高生

コンセプトを考える3つの軸

だれに？

いちばん届けたい人、
読んでほしい人はだれ？

どうなってほしい？

読ん
何を

何を伝える？

何を

ワーク2	
ルールメイキングの情報発信コンセプトシート	
だれに？ いちばん届けたい人・ 読んでほしい人はどんな人？	メッセージを届けたいのはどんな人？ ・学校やクラスや街の中の人？外の人？ ・伝えたいことについて、詳しく知っている人？少しだけ知っている人？ ・全く知らない人？ ・どんなことに興味がある人？どんなことだったら興味を持ってくれそう？ ・伝えたい人が困っていることや悩んでいることや知りたいことは？
どうなってほしい？ 読んだあと、どう思ってもらいたい？ どんな行動をとってもらいたい？	達成したいことはなんだろう？よくばらずに、ひとつだけでもOK ・何をしてほしい？（行動） 例「読んでもらえる、読んでほしい」 ・何を思ってもらいたい？（感情） 例「読んでほしい」「読んでほしい」「読んでほしい」 ・何を言ってもらいたい？（セリフ） 例「読んでほしい」「読んでほしい」「読んでほしい」
何を伝える？ 何を伝えれば、届けたい人が 読んだあとに理想の状態 （感情や行動）になる？	伝えたいことは何？たくさんあってOK！記事のネタリストになる！ ・読んでほしい読者に、読んでほしい状態に、何を伝えたい？

▲他にも情報発信のプロを講師にお呼びし、座学と実践をゼミ内では行っています

3.実施内容

ムーブメントづくり：「みんなのルールメイキング宣言」の策定

みんなのルールメイキング宣言とは、ルールメイキングに関わるすべての人が立ち帰れるような指針をまとめた宣言です。校則見直しに携わる生徒や先生、一般公募で集まった中高生有志メンバー、さまざまな専門分野の有識者サポーターらとともに約半年にわたり検討をつづけ、宣言文を策定しました。



▲【公開トークセッション】全6回開催し、ルールメイキングエッセンスについて対話を重ねました。



監修：
苫野一徳氏
(熊本大学教育学部 准教授)

編集：
古田雄一氏
(大阪国際大学短期大学部 准教授)

古瀬正也氏
(古瀬ワークショップデザイン事務所)



▲読み取り用QRコード

▲【学校の"あたり前"を問い直す 生徒と先生の挑戦】11月20日宣言公開イベントを開催しました。

3.実施内容

ムーブメントづくり：ルールメイキングフォーラム2021の開催

2021年度の成果報告の場として、ルールメイキングフォーラム2021を2月23日（水）に開催しました。先進事例校・実証事業校からの実践報告のほか、「私とルールメイキング」というテーマで、数名の先生・生徒から実践者個人のストーリーを語る報告時間も設けました。

■参加校：

岩手県立大槌高等学校

大垣市立東中学校

泉大津市立小津中学校

大阪夕陽丘学園高等学校

駒場学園高等学校

自由学園中等科・高等科

千葉県立姉崎高等学校

栃木県立足利清風高等学校

ドルトン東京学園中等部

新渡戸文化中学高等学校

ノートルダム女学院中学高等学校

安田女子中学高等学校

山形県立遊佐高等学校



The banner for the Rule Making Forum 2021 features the 'RULE MAKING' logo on the left and a central title '2021 ルールメイキングフォーラム' with '参加費 無料' (Free participation fee) in a purple circle. Below the title, it says 'Zoomによるオンライン開催' (Online event via Zoom) and '校則の見直しに取り組んだ生徒・先生たちの1年間のストーリー ~全国13校の事例から紐解く、新しい学びのかたち~' (A 1-year story of students and teachers who tackled school rules, unravelling examples from 13 schools nationwide, the shape of new learning). At the bottom, there are three circular portraits of speakers: 荻野純純さん (Ms. Kohino Junjun), 浅野大介さん (Mr. Asano Daisuke), and 今村久美 (Ms. Iimura Kumi), with their respective affiliations listed.



3.実施内容

ムーブメントづくり：ルールメイキング委員会

サポーター

安部 芳絵

工学院大学

神野 元基

合同会社LINKALL

内藤 佐和子

徳島市長

今村 久美

認定NPO法人カタリバ

末富 芳

日本大学

中島 さち子

株式会社steAm

内田 良

名古屋大学

瀬戸 昌宣

NPO法人SOMA

平井 聡一郎

群馬県南牧村教育委員会

勝野 正章

東京大学

田中 麻衣

就学前学校
Tellusbarn校長

真下 麻里子

弁護士

讃井 康智

ライフイズテック株式会社

苫野 一徳

熊本大学

安田 馨

安田女子中学高等学校

若新 雄純

株式会社NEWYOUTH

中高生メンバー

筑波大学附属

坂戸高等学校 生徒会

筑波大学附属坂戸高等学校

藤田 崇都

千葉県立成田国際高等学校 3年

熊本県立

熊本農業高等学校 生徒会

熊本県立熊本農業高等学校

藤田 星流

東京大学附属中等教育学校 6年

安達 晴野

東京都立北園高等学校 3年

まき

N高等学校 3年

角谷 樹環

北海道中川郡幕別町立
幕別中学校3年

渡邊 すみれ

平塚学園高等学校 3年

林 樟太朗

近江兄弟社中学校 2年

※順不同・敬称略

3.実施内容

交流支援：ルールメイキングキックオフ・生徒交流会

ルールメイキングに取り組む生徒が学校を超えて交流する環境を構築し、同世代の友人の活動に刺激を受け、多様な意見に触れることで視野を広げる学び合いの機会を作りました。



▲ルールメイキングキックオフ
7月11日に開催しました。



▲生徒交流会
9月25日、および12月18日に開催しました。

4. 得られた成果

KATARiBA
Shape the Future

4.得られた成果 成果のまとめ

	狙い	取組み内容	成果
①プログラム開発/先進事例作り (個別伴走支援)	多様な学校に対応できるプログラム開発 <ul style="list-style-type: none"> 私立・公立・都会・地方・小規模・大規模など、多種多様な学校でプログラムを実施することで、どのような学校にも対応できるプログラムを完成させる。 	11の実証事業校に個別伴走支援 <ul style="list-style-type: none"> 教材提供 教員研修の実施 コーディネーター派遣/育成 <ul style="list-style-type: none"> プロジェクト推進 校則検討WSの実施 	<ul style="list-style-type: none"> 各校での多様な実践の創出 本質的な取り組みになるためのキーポイントの特定
②自治体伴走支援モデル開発 (県・市区町村)	次年度以降の自然普及プランの開発 <ul style="list-style-type: none"> 単年で直接支援を終え、翌年からは自走(自然普及)できるモデルの開発。 	県・市・町の教育委員会に対してルールメイキングノウハウの提供 <ul style="list-style-type: none"> 教材提供 各種ノウハウ提供研修 自治体間交流の実施 	<ul style="list-style-type: none"> 指導主事モデル/地元人材活用モデルそれぞれの強みと課題の特定 拡大に向けた打ち手の設定
③学校自走支援モデル開発	スケール可能な非ハンズオン支援の開発 <ul style="list-style-type: none"> 個別伴走しない支援モデルを開発することで、費用対効果の高い導入モデルを開発する 次年度以降の自走可能モデルの開発。 ルールメイキングの興味のある教員を支える 	間接支援でも効果をあげられる仕組み作り <ul style="list-style-type: none"> パートナー制度の設置・拡充 <ul style="list-style-type: none"> 教材提供 教員研修の見学 講師派遣 教員コミュニティの開設・運用 相談チャットの開設・運用 	<ul style="list-style-type: none"> 非ハンズオン支援(パートナー制度)の開発
④ムーブメントづくり	ルールメイキングの機運情勢 <ul style="list-style-type: none"> ルールメイキングに興味のある教員や個人を増やす 「ブラック校則の是正」ととどまらない、「対話的なルールメイキング」の理念浸透・発信 	「対話を通じたルールメイキング」の発信 <ul style="list-style-type: none"> 各種SNSを活用した情報発信 HPの整備・拡充 各種メディア掲載 #みらいの校則コンテスト開催 中高生発信ゼミの運営 「ルールメイキング宣言」策定 ルールメイキングフォーラム開催 	<ul style="list-style-type: none"> 各種SNS・メディア誘致を用いた対話的ルールメイキングの認知獲得 当事者の立場からの情報発信の増加 ルールメイキング宣言の策定
⑤交流支援	学び合う力の養成 <ul style="list-style-type: none"> 学びとは、大人から教えてもらうことでのみ生まれるのではなく、同世代の友人から得られることを知る 他校生徒の考えを聞くことで、多様な考えを持てるようにする 	交流会の実施 <ul style="list-style-type: none"> 生徒交流会、生徒間交流の実施 ルールメイキングシンポジウムの実施 中高生メンバーのPJ参画 	<ul style="list-style-type: none"> 他校との情報交換を通じたルールメイキングの促進 実践者同士の主体的な交流機会への発展

4.得られた成果

実践事例一 泉大津市立小津中学校

これまでの経緯

R3年7月 キックオフ	R3年9月 全校クラス会議①	R3年10月 調査活動	R3年11月 先生・PTA・生徒 との対話	R3年12月 学校運営協議会との対話	R4年1月 新ルールの実用
生徒会+有志によるプロジェクトチームが発足	全クラスで、校則やルールについて話し合うクラス会議を実施	全校生徒・保護者へのアンケートや制服業者・市教委へのヒアリング調査を実施	新ルール案について、先生・PTAとの対話会、全校クラス会議を実施	新ルール案について、学校運営協議会との対話	①体操服については12月から運用開始 ②iPad・新制服については運用に向けた詳細検討開始

具体的な取組み

① 全校クラス会議

「見直したい校則」について意見を出し合う「クラス会議」を、全クラスで一斉に行いました。進行は生徒会&有志生徒による「ルールメイカー（ルールメイキングの担当生徒）」たちが担いました。数日前には、朝礼では、ルールメイキングのこれまでの活動を知ってもらい、協力をよびかける動画を流した後、ルールメイカーがスライドで活動PRをしました。



② 調査活動

全校クラス会議の意見、先生方への個別ヒアリング結果を踏まえ、「服装（制服）」と「iPad」について検討することを決めました。新ルール案をつくるために、iPadを用いて全校生徒・保護者へのアンケート調査を実施しました。合わせて、制服業者・市教委ICT担当職員へのヒアリング調査を行い、新ルール案づくりの進めました。



③ 先生・PTA・生徒との対話

調査活動を通じて作成した新ルール案についての対話会を、各学年の先生及びPTAとそれぞれ実施しました。ルールメイカーから新ルール案について説明したのち、新ルール案についての質疑応答や意見交換を行いました。これらの対話会を受けてブラッシュアップした新ルール案について、全校クラス会議を実施して、全校生徒から意見を集めました。



④ 学校運営協議会との対話

新ルール案について、学校運営協議会との対話を行いました。対話を経て、制服（服装）については①誰もが着たいと思える制服をめざして、見直しを開始すること②一年中体操服を着用しても良いものとする、iPadについてはiPad活用三原則に基づき、iPadの運用や細かなルール作りを行うことが決まりました。



4.得られた成果

実践事例一大垣市立東中学校

これまでの経緯

R3年6月 キックオフ	R3年7月 大切にしたいテーマを決定 全校生徒から意見募集	R3年8月 意見交換会	R3年10月 生徒議会	R3年12月 後期チームスタート	R4年1月 次年度への伝承
生徒会を基盤に活動を開始	意見箱で意見を募集。その上で生徒会で大切にしたい想いをもとに今年度取り組むテーマを話し合った	地域・保護者・先生から意見を聞く会を実施した	試用期間を経て体操服や靴下など各クラスごとの意見をまとめ、議会で話し合った	生徒会だけではなく、有志の生徒も参加し、総勢20名以上の生徒が後期メンバーとして集まった	次の学年へどのようなプロセスや変更があったかを伝える資料を作った

具体的な取り組み

① 大切にしたいテーマを決める

見直す校則を決めるために、どんな決め方やどんな優先順位がいいかを話し合い、「安心・安全に過ごせること」と「生徒全員を巻き込みながら活動したいこと」が活動の軸となりました。その結果、意見箱を設置し、放送で案内し、全校生徒からの意見を集めることを決定しました。その様子はメディアにも紹介されました。



② 意見交換会

地域の方、保護者の方、有識者の方（マスコミ）、学校の先生等、異なった立場の方から、様々な考えを聞きました。「同じルールでも、立場が違えば見え方も違う!」と、異なる価値観も尊重しながら、話し合うことができました。「まずはやってみよう!」と地域の方から発言があり、生徒たちも刺激を受け、試用期間を設けることになりました。



③ 生徒議会

試用期間を経て、体操服や靴下など各クラスごとの意見をまとめ、議会で話し合いました。決め方についても社会の教科書で憲法の改正方法を参考にして「クラスごとに3分の2以上の承認をし、議員の全会一致で議決」という方針に。各クラスごとに意見をまとめるプロセスの中で、全校生徒が話し合いに参加しました。このような経験から、生徒は「自分たちの力で学校は変えられる!」と感ずることができ、自分たちの場所（=学校）をより良い場所にしていく重要性を学んでいきました。



④ 後期チームスタート

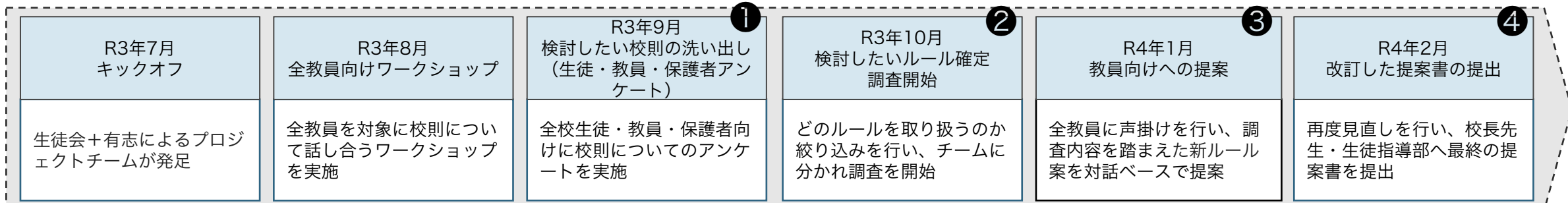
後期は、生徒会だけではなく、活動したい生徒を広く募集したところ、20名以上から希望がありました。動機としては「自分たちで学校をよくしたい」「将来役に立ちそう」など前向きな意見が出ました。1年生から3年生までが参加し、学年間の壁を越えて話し合いがスタートしました。後期では主に、新入生に向けて、新しい校則や校則改正までの流れについて説明する文章の作成や、活動報告書を作成する活動を行いました。



4.得られた成果

実践事例一四條畷学園中学校

これまでの経緯



具体的な取り組み

① アンケートの実施

キックオフを実施し、学校がどのように理念で経営しているのかを学んだ後、現在の校則についてどのように考えているのかを知るために、全校生徒・教員・保護者向けにアンケートを行いました。生徒449名、教員19名、保護者321名と高い回答率となり、どの内容を今年度取り組むのかを話し合いました。話し合いの結果「校則の男女統一」「(登下校中の)緊急時の連絡方法」「校則の明文化」に絞り込みチームごとに活動をスタートしました。



② 調査開始

各チームごとに調査を開始しました。LGBTQの団体へ性に関するヒアリングや他校の私立中学校にスマートフォンの持ち込みについての調査、災害に取り組む企業へのヒアリングなどを行い、どのような提案内容にしていくのかを深めていきました。校則の明文化チームは、教育委員会のHPに全校の校則を公表している自治体に問い合わせ経緯などを伺いました。また活動内容を全校生徒に知ってもらおうと掲示板への掲示やルールメイキング新聞を作成し、全校生徒向けに配信を実施しました。



③ 教員向けへの提案

提案書を生徒指導部に提出する前に、教員向けに提案会を実施しました。多くの教員に集まっていただくために、1人ずつ手渡しで手紙を作成し、参加の声掛けを行いました。最終的には20名以上の教員に集まっていたいただき、各チームごとに、色々と視点から提案内容に関する意見交換を行うことができました。教員一人ひとりからコメントやフィードバックをもらい、対話を深めていく中で、目標にしていた「みんなが過ごしやすい学校」へと近づいていきました。



④ 校長・生徒指導部へ提案

各チームごとに教員から出てきた内容を踏まえて、提案内容の見直しを行い、最終版の提案書を作成しました。まずは、校長先生への提案会を実施し、学校経営目線からの指摘も受けることができました。さらに生徒指導部や有志の教員にも意見を募ったあと、生徒指導部へ提案書を提出。提案については、生徒指導部で詳細などの確認と検討を実施した上で、職員会議内で最終的な協議を行い、審議を実施していく予定です。



4.得られた成果

実践事例ードルトン東京学園中等部

これまでの経緯

これまでの経緯	① R3年6月 キックオフ	② R3年10月 生徒・教員対話会	③ R3年12月 オンライン交流	④ R4年3月 生徒総会の実施	
	R3年9月 新体制について話し合い	R3年11月 DSC新体制キックオフ	R3年12月 オンライン交流	R4年3月 生徒総会の実施	
	モチベーション曲線ワークを用いて、DSCの現状把握を実施	メンバー全員で新体制のアイデア出しを実施	複数の委員会を統合した新組織が確定	安田女子中高生徒会・坂戸高校生徒会・古瀬正也さんとの交流会を実施	全校一斉対話を実施する生徒総会「ぶっちゃけ！ドルトーク！」を企画・実施
		テーマ 「ドルトンに対する想い」			

① キックオフ

既存の生徒自治組織DSC (Dalton Student Council) の再編成を目標として、ルールメイキングプロジェクトをスタートさせました。DSCを立ち上げた経緯や、加入した理由などを振り返りながら、一人ひとりが何をモチベーションに生徒自治活動に参加してきたのかを、お互いに知り合う活動を行いました。現在のDSCの課題についても、全員で共通認識を持ちました。



② 生徒・教員対話会

生徒約25名と先生約20名で、生徒のこれまでの活動を周囲に知ってもらうことや、先生、生徒がフラットに対話し、考えを共有することなど目的に、対話の会を実施しました。終了時、生徒からは「先生が同じような気持ちでドルトンを良くしていきたいと思っていることを確認できて良かったし、楽しかった」、先生からも「生徒が考えていることがよくわかり、良い学校にしていきたいという気持ちを新たにした」という声がありました。



③ オンライン交流会

生徒組織や生徒総会を運営するにあたり、他校の実践事例を知るため、安田女子中生徒会、坂戸高校生徒会とのオンライン交流会を実施しました。生徒による学校づくりについて、様々な事例を知ることで、生徒自治について理解が深まりました。また、ワークショップデザイナー古瀬正也さんとの交流では、学校全体で対話を促進していくためのアイデアや工夫についてレクチャーを受けました。生徒総会では全校一斉対話を実施するために、生徒が中心となり計画を立てました。



④ 生徒総会の実施

オンライン交流会も踏まえて、生徒総会のイメージを膨らませた上で、「フラットに率直な想いを生徒も先生も言える」ことを大切にしたい生徒総会「ぶっちゃけ！ドルトーク！」を企画しています。委員会の活動報告等は生徒や先生全員が集まる場ではなくてもできるという発想のもと、「対話」を重視した新しい生徒総会の形を生徒が生み出しています。

生徒総会に向けて

12/9に考えた第1回生徒総会の目的

- フラットな関係 (DSCと生徒会、生徒と教員側)
 - DSCと他の生徒、と対話する必要がないのでは？
 - キックオフ、今はDSCがある。まだみんな一層に！
- 正直に意見が言える、本音が伝わる
 - 先生にも多少の口角
 - 意見が出ないこともぶっちゃけよう
- スッキリして終わりたい、ワクワクする未来が見える。期待を持って
 - 一緒にやりたいと思える
 - 継続はできる、力を貸せばできるということを表現できる
 - アンケート、写真も、月一も再確認できる

生徒総会では具体的に何をやる？

生徒会と生徒会との関係、生徒会と生徒会との関係

具体的な取組み

<p>R3年6月 キックオフ 見直す校則ワーク</p> <p>自己紹介や大切にしたい事を共有するワークを実施</p>	<p>R3年9月 他校のアクションから学ぶ</p> <p>公開トークセッションで報告された事例を参考に、活動を考えるワークを実施</p>	<p>R3年10月 生徒総会での ワークショップ</p> <p>生徒総会の時間を使い、生徒が生徒と教員向けのワークショップを実施</p>	<p>R3年10月 掲示板上作成</p> <p>学校内で昇降口に模造紙で活動の共有とコメントが書ける掲示板を作成</p>	<p>R3年11月 チーム制の導入 関係者へのインタビュー</p> <p>容姿・スマホ・アルバイト+情報発信チームの4つに分かれた活動体制に変更</p>	<p>R4年12月～ アンケート作成と 年度の活動のまとめ</p> <p>各チームでより多くの人を巻き込むことを意識した活動中</p>
--	--	--	--	--	---

① キックオフ プロジェクト紹介動画の作成

生徒会+有志の生徒でプロジェクトを発足しました。キックオフの場では、先生が生徒と同じ目線に立って対話を行うことを「先生による宣誓」という形で宣言。生徒・先生間の関係性が深まった契機となりました。また自分の感じている違和感について言語化するために「遊佐高校でひとつ何か変えるなら」ワークを行いました。さらに同時期、学校やルールメイキングの取り組みを紹介するために「うっせえわ」の替え歌PVを作成。ネットを中心にから大きな反響がありました。



② 他校のアクションから学ぶ

チームの中で「見直す校則」について方向性が定まってきたタイミングで、他校の活動やアクションから活動のヒントを得るための時間を設けました。実証事業校の生徒・先生・サポーターが参加し、ルールメイキングの事例を報告する「公開トークセッション」を視聴した生徒からは、「放課後にワークショップ出来たらいいよね」「遊佐高校の伝統やブランドって何だろう？」などの声が上がっていました。



③ 生徒総会での全校生徒・ 全教員のワークショップ

生徒会のメンバーが中心となり、生徒総会を企画。全校生徒・全先生が参加し、「校則に違和感はありますか?」「もし校則を変えるならどんな校則を変えたいですか?」の2つの問いについて、対話を深めました。参加した生徒からは「みんなにとって通いやすくなるような高校にしたい」「個性を大切にできる校則にしたい」といった意見、先生からも「生徒にとって負担の大きい校則は見直してもいいのでは」等の意見が出ました。



④ チーム制の導入 地域へのインタビュー

見直したい校則(容姿・スマホ・アルバイト)毎に、チームに分かれて活動を開始。それぞれのチームで、学校の生徒・先生・地域の方などに調査を実施しました。地域にあるスーパーマーケットには、高校生がアルバイトをすることに関する聞き取り調査を実施。担当者からは「地域で人を育てていく意識が大事」「高校生と働けたら、商品開発とかも一緒に出来たらいいかもね」など力強いメッセージをもらい、プロジェクトの推進力となりました。



4.得られた成果

実践事例一 栃木県立足利清風高等学校

これまでの経緯

①	②	③	④
R3年6月 チームビルディング CNを交えたキックオフ	R3年7月 清風ルールメイキング宣言・全校生徒に一斉調査	R3年9月 生徒の提案により自動販売機に関するルールが変更	R3年10月 スクールロイヤーを講師として招き、教員研修を実施
R3年11月 就職先の地元企業3社や、保護者にも聞き込み調査	R4年2月 生徒が2チーム (髪型・服装)に分かれ、 新ルールを提案		
まずは先生と生徒が「本音を言い合える関係性づくり」を重視し、チームビルディングを行った	全校生徒の意見を集めるため、「ルールメイキング宣言」を行い、アンケート協力を呼びかけた	全校調査の結果を受け、緊急性・実現性・重要性が高い「自動販売機のルール」の改善案を提案、変更	教職員の人権意識を高めたり、校則・ルール、生徒指導のあり方について広く対話をするため、研修を実施
髪型や服装の規定を見直すあたり、就職先の地元企業や保護者の考えを知るために、調査を実施	これまでに集まった全校生徒・先生・保護者・企業等の声を反映させ、新ルール案を提案		

具体的な取組み

① チームビルディング キックオフミーティング

ルールメイキング委員会の活動序盤では、生徒も先生も立場を超えて「本音が言い合える関係性づくり」に重点をおき、チームビルディングを行いました。キックオフの場では、生徒・先生それぞれが現在の校則やルール、生徒指導に対して感じていること、活動に参加した理由、ルールを見直す上で大切にしていきたいこと等を話し合いました。



② ルールが実際に変更され、 「動けば変わる」体験を積む

全校生徒への調査を行い、緊急性・実現性・重要性の高かった「自動販売機の使用制限」のルールの変更案を提案。校内で提案が通りルールが変更となったことで、委員会の生徒たちからは、「どうせ何を言っても変えられないと思っていたけど、実際に自分が動けば変わるんだ」「この体験を、もっと他の生徒にも届けたい」などの声が寄せられました。



③ 外部講師を招いた 教員研修・ワークショップ

教員全体で人権への意識を高めることや、校則・ルール・生徒指導のあり方等について広く対話を行うことを目的として、教員研修会を実施しました。講師としてスクールロイヤーで現役教員の神内弁護士をお招きして講演を聞いた後、人権の観点で見直したい校則や校内でのルールメイキング活動の広げ方について検討するWSを行いました。



④ 就職先の地元企業や 保護者への聞き込み調査

現在の髪型・服装に関する規定を見直すあたり、就職活動にどのように影響するのか等を調査するために、地元企業3社にインタビューを行いました。また保護者の方にもオンラインでアンケート調査を実施するなど、学校内外の関係者の視点も取り入れながら、新ルールの提案に向けて準備をしました。



これまでの経緯	R3年6月~7月 キックオフ 課題等の洗い出し	R3年7月 先生・生徒への個別ヒアリングと動画作成	R3年8月~ 企業や地域、保護者へのヒアリング	R3年10月 生徒と先生の対話会	R3年12月 全校ワークショップ 新校則の周知活動	R4年2月 試行期間
	目的・目標の共有、見直す校則の洗い出しと優先順位づけ、活動方針やスケジュール設定、他校の校則などの調査を実施	先生方一人ひとりへのヒアリングを実施。生徒にも個別ヒアリングを行いながら、ムービーを作成	夏休みを利用して、企業や地域の方々、保護者会への取り組み紹介&ヒアリングを実施	プロジェクトメンバーがファシリテーターとなり、生徒と先生の対話会を実施	新ルール案を職員会議で提案。新ルール案の試験導入に向けて、全クラスでワークショップを実施	2月に試行期間を実施し、3月以降に新ルール導入を目指す

① 先生・生徒への個別働きかけとプロジェクトムービー作成

見直す校則の整理や関連調査が完了した段階で、先生一人ひとりにヒアリングを実施。校則を変えることや、生徒主体で活動していくことに対して、先生からの率直な意見を聞くことができ、夏休みの企業・地域ヒアリングに向けて「誰のどのような意見を集めることが必要か」というヒントを得ました。また、全校集会でプロジェクトを紹介する動画を放映してプロジェクトについての周知を行いました。動画作成を通して、PJメンバー以外の生徒の声も聞くことができました。



② 企業や地域・保護者へのヒアリング

夏休み期間を利用し、PJメンバーが中心となって①地元の企業や市役所へのヒアリング調査、②保護者会での活動共有とアンケート調査、③最寄り駅での街頭インタビュー調査などを行いました。見直したいと思っている校則について、「どこまでなら変えても良いと思うか」について聞き取りを行った結果、変えること自体について前向きな回答がほとんどであり、プロジェクトを前進させる上での大きな推進力となりました。



③ 生徒と先生の対話会

先生との対話の機会を作ることを目標に、3日間かけて「生徒と先生の対話会」を開催。当日は、先生と生徒が混ざった少人数グループディスカッションを行い、全体共有という流れで実施しました。全体のファシリテーションは生徒会長が行い、各グループのファシリテーションはPJメンバーが担いました。調査結果を共有した後、生徒が先生からの意見を聞くと同時に、先生同士もお互いの意見を聞く重要な機会になりました。



④ 全校ワークショップ
新校則の周知活動

新ルールの試験導入に向けて、全クラスでワークショップを実施。PJメンバーが全クラスに訪問し、校則を変える上での懸念点や、それをどう解決していけるかについて話し合いました。生徒同士で「想定される課題とそれへの対応策」を話し合う姿をみて、先生からも「想像以上に生徒が問題をしっかり認識していて、安心できた」という声が聞かれました。新ルールについては、PJメンバーが中心となり、校内で周知活動を行いました。



4.得られた成果

実践事例一駒場学園高等学校

これまでの経緯

①	R3年6月 キックオフ	②	R3年9月 3つのチームへ分科	③	R3年10月 チーム活動を推進	④	R3年12月 活動成果報告会	R4年2月 3つのチームの統合
	チームビルディング CNを交えたキックオフ		宣言文の作成、見直したい 校則の検討、良いルール の探究という3つのグルー プに分科		3つのチームがそれぞれの 目標を達成するためにチ ーム活動を実施		中間報告として 活動成果報告会を実施	プレゼンノウハウのイン プットの実施や3チーム統 合に向けた動き

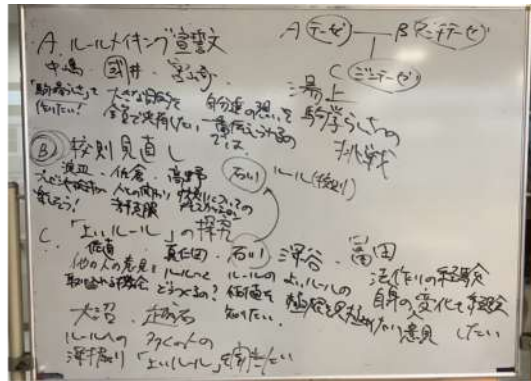
① チームビルディング

チームビルディングワークショップを行い、「ルールメイキングプロジェクトへの想い」を1人ずつ全体へ共有していきました。また、これからのプロジェクトを推進にあたって「大切にしたいこと」をシェアすることで、チームとしての共通認識を醸成することができました。



② 3つのチームへ分科

A 「ルールメイキング宣言文作成チーム」
B 「見直したい校則案作成チーム」
C 「良いルールの本質を探究するチーム」
それぞれのグループを三権分立のようなイメージで相互補完的に位置づけ、チームを編成しました。誰がどのチームに属するか、全体のバランスはどうか等、チーム決定は生徒主導で行い「対話を通じて納得解を導く」ことを体感できる機会となりました。



③ チーム活動を推進

・職員室へ出向きプロジェクト担当ではない先生方へヒアリングを実施
・企画書の承認を取り全校生徒/先生方や関わる保護者を対象にアンケートを取り集計
・弁護士の先生を招き法律の観点でみた校則についてインタビューを実施
等、各チームのテーマに合わせて、様々なアクションを行いました。



④ 活動成果報告会を実施

約2カ月のチーム活動を
1. チームの活動目的
2. これまでの活動内容
3. 活動の成果
4. 今後の活動方針
のフレームに沿って、発表しました。プロジェクトの担当ではない先生方が多く参加し、生徒たちと意見交換をしました。



具体的な取組み

4.得られた成果

実践事例一自由学園中等科・高等科

これまでの経緯

①	②	③	④		
R3年6月 キックオフ	R3年8月 他校との 合同ミーティング	R3年9月 教員研修会	R3年12月 アンケート調査	R4年1月 提案書・引継ぎ書の作成	R4年2月 成果報告
ルールを考えるうえで大切にしたいことを対話	新渡戸文化との合同ミーティングを3回実施	ルールメイキングのアンケートを活用した教員研修の実施	ルール選定及び、身だしなみに関するアンケート実施・集計	男子：私服登校の試行期間実現に向けた提案書の作成 女子：翌年度に向けた引継ぎ書の作成	3月の成果報告会にて成果報告。翌年度以降の活動へ継承

① キックオフ

プロジェクトメンバーの自己紹介を行った後、活動3回を経て「ルールとは何か」「ルールと向き合ううえで大切にしたいこと」「大切にしたいことに照らし合わせた時の自由学園の問題点」等をディスカッションを行いました。「目的が明確で周知されている」「個を尊重する/個の人権を傷つけない」というコンセプトが対話の中から共通目的として生まれました。



② 他校との合同ミーティング

カタリバ主催のイベントで同室になった新渡戸文化中高とのコラボミーティングを夏休み中に実施しました。イベント後の生徒たちの呼びかけを起点に開催されました。内容としては、お互いの学校生活の共有や、ルールメイキングプロジェクトを進めるうえでの想いのシェアや、進めるうえでの悩みや意見交換など。3回に渡って様々な対話をオンラインで行いました。



③ 教員研修会

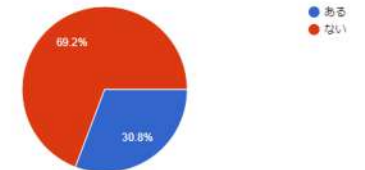
①男子部・女子部×中等部・高等部を抱える自由学園にて、ルールメイキングを周知すること②教員全員に今の学園の在り方を見直していただくことを目的に、ルールメイキングプロジェクトで実施したアンケートを材料にワークショップ形式の教員研修会を開催しました。アンケートでの他校比較に触れ、学校の在り方を教員全員で問い直す機会となりました。



④ アンケート調査

身だしなみのルールに男女ともに向き合うことに決定。その後アンケートを作成し、昼休みの懇談の時間による対話も並行しながら、他の生徒・教員の意見に触れました。男子は私服登校の試行期間の合意形成を目標に、女子は高校2年生が身だしなみ検討の主体であることから、現時点での活動内容の引継ぎ完了を目標に、年度内の残りの活動を過ごす予定となっています。

Q7-一方で、身だしなみのルールを見直すことに対する不安や懸念はありますか。
117件の回答



具体的な取組み

4.得られた成果

実践事例一大阪夕陽丘学園高等学校

これまでの経緯

R3年6月 キックオフ	① R3年7月 見直したいルール学内調査	② R3年9月 見直すルールの見直し	R3年10月 調査活動（校内）	③ R3年11月 調査活動（外部）	④ R3年12月・1月 校務運営委員会への 提案会実施
生徒会によるプロジェクトチームが発足	全校生徒向けのアンケート調査や、掲示物での意見回収を行い、生徒の声を集める	学内調査の内容をまとめ、どのルールを見直すか検討	生活指導の先生への調査や、PTAとの対話会を実施	専門家や大学へのインタビュー調査と街頭調査を実施	管理職・部長が集まる校務運営委員会に対して6項目の新ルール案を提案

具体的な取り組み

① サマークリスマス

見直す校則を検討するために、全校生徒向けの調査を開始。アンケート調査で生徒の困り事を調査したと同時に、付箋で意見を書けるサマークリスマスという取り組みを実施しました。アンケートでは掘めなかった、全校生徒の生の声やどの意見が多いかを調査することができました。また、サマークリスマスを担当する生徒が決まり、自主的にリーダーシップを発揮して活動に取り組むことができました。



② オープン会議

見直すルールの絞り込みを行い、コアメンバー以外の生徒や教員に方針を確認するためにオープン会議を開催。1回目は参加者が0人で、他の生徒や教員を巻き込むことができませんでした。2回目に向けて、生徒へは地道に声かけを行い、教員には招待状を作成し、直接手渡して参加を促しました。その結果、2回目は20名以上に参加してもらい、見直す校則について共に検討することができました。



③ 街頭調査

生徒の発案で、街頭調査を行うことになりました。日時や警察とのやり取りは教員で行いましたが、どんな内容を聞かや読み上げる文章の作成は、生徒自身で行いました。また当日スムーズに意見を聞けるように、シールを貼るボードも自分たちで作成し、大阪難波の高島屋前で調査を実施しました。その結果、中高生だけでなく保護者や地域の方の意見も取り入れることができ、社会の校則へのイメージを可視化することができました。



④ 外部調査

弁護士、LGBTQの当事者、大学の入試センター、化粧品関係者等、外部セクターへの調査を多く行いました。当初は生徒からの依頼で、教員やコーディネーターが外部セクターと繋いでいましたが、その後は生徒自身が自ら連絡を取って調査を行いました。化粧品会社にメールで質問したり、近隣の商業施設に聞き取り調査に行ったりと、最終的には教員のサポートなしで、自分たちで調査を進めることができました。



4.得られた成果

実践事例ーノートルダム女学院中学高等学校

これまでの経緯

R3年6月 キックオフ	R3年7月 キックオフ	R3年9月 見直す校則について ディスカッション	R3年11月 少人数チームで 再スタート	R3年12月 プロジェクトの方向性 に関する議論	R4年2月 職員会議での 生徒発表
担当教諭との顔合わせを行い、ルールメイキングのスケジュールリングを確認	ルールメイキングに参加する生徒と初顔合わせ。プロジェクトとして、大事にしたいことを議論	見直す校則を洗い出し、プロジェクトとして取り組みたい校則を既製品、放課後、ITの校則に絞る	プロジェクト推進を本格化させるために、少人数のチームで再編成。改めてキックオフを実施	先生方とコーディネーターとで、プロジェクトの方向性について議論	職員会議で生徒たちから発表を行い、先生方からの活動の理解を得る

具体的な取り組み

① チームビルディング キックオフミーティング

担当教諭から呼びかけをし、集まった16名の生徒と顔合わせを行いました。これからルールメイキングプロジェクトに取り組んでいくにあたり、チームとして大切にしたいことを話し合い、「自分の意見をはっきり主張する」、「先輩と後輩の差をつけない」等、今後の取り組み方について想いを交わしました。



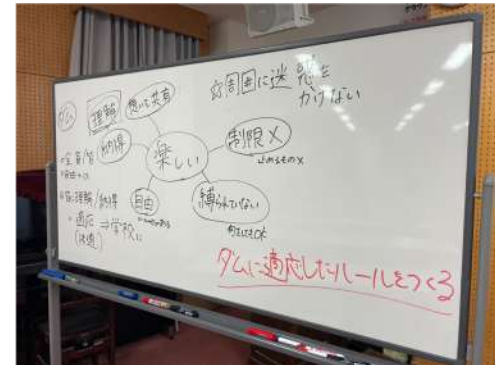
② 見直す校則について ディスカッション

全校生徒にヒアリングをする前に、プロジェクト内でどのような校則に悩んでいて、何を解決したいかを議論しました。チーム内で課題だと考える校則を「制定品」「放課後ルール」「ITの取扱い」の3つに絞りました。特に、コートが重い割に温かくない、靴下がすぐに破れてしまう等の制定品に対して白熱した議論が行われました。



③ 少人数チームで再スタート 目指したい姿を決定

コロナの影響もあり、夏休み明けの活動が停滞していた中、プロジェクト推進を加速させるため少人数での活動へシフト。ルールメイキングを通して達成したいゴールを「学校に適用したルールを作る」に決め、再スタートを切りました。自分たちの出した意見に対する全校生徒、先生の思いを確認するため、アンケートを実施しました。



④ 職員会議での生徒発表 校則改革のスタートライン

チームの連携方法を再度見直し、プロジェクトを再始動。生徒たちのルールメイキングに対する姿勢を理解してもらうために、2月2日の職員会議で活動について発表を行いました。この発表がきっかけとなり、先生方も改めてプロジェクトの方向性を確認し、学校全体として校則改革に向けて前向きに取り組んでいくことになりました。



4.得られた成果

自治体伴走支援モデル開発：自治体連携による活動成立 および広域展開に向けた展望

広島県は指導主事3名の配置、福井県は外部民間人材5名をコーディネーターとして活用する体制を組み、それぞれ異なるパターンでの実証を行った。それぞれの地域で校則見直し活動が進展し、来年度に向けて広域展開のプランや支援人材人件費の拠出など、自律的な取り組みに向けた展望につながっている。

広島県

実施体制：指導主事派遣型

- 担当課：豊かな心と身体育成課
- 指導主事3名を6校へ派遣
(エリア別：2校ずつ担当)

- 1.広島県立 黒瀬高等学校 : 東広島エリア
- 2.広島県立 西条農業高等学校 : 東広島エリア
- 3.広島県立 音戸高等学校 : 呉エリア
- 4.広島県立 呉三津田高等学校 : 呉エリア
- 5.広島県立 尾道商業高等学校 : 尾道エリア
- 6.広島県立 因島高等学校 : 尾道エリア

取り組みの成果

- 実証校6校で校則の見直しが終了

指導主事が伴走者となって各校の取り組みに対して定期的に相談に乗り、サポートした。

学校の自律的な取り組みにより、実証校6校全校が2月末までに校則の見直しを終了した。

来年度の展望

- 全県でのルールメイキング実施

- ・令和3年度の取り組みを県内で共有し、令和4年度以降も県立高校における校則の対話的見直しを働きかける

福井県

実施体制：民間コーディネーター派遣型

- 担当課：高校教育課（生徒指導チーム）
- 支援体制：
民間人材5名からなる支援チーム
(事業統括2名＋コーディネーター3名)

- 1.福井県立高志高校
- 2.福井県立勝山高校
- 3.福井県立若狭高校
- 4.福井県立敦賀高校
- 5.福井県立三国高校

取り組みの成果

- コーディネーターが活動の推進者として機能し、対話機会の創出に貢献

- 実証校5校で校則見直しの提案実施

- 各校で令和4年度も校則見直し活動の継続に向けた体制整備
(生徒会活動への位置付け、委員会活動としての継続等)

来年度の展望

- 県独自の取り組みとするための検討が進展

- (1) コーディネーターの継続確保
・ルールメイキング推進人材となるコーディネーターの派遣費用の独自予算化を検討

- (2) 継続実施校・新規実証校の設定
・令和4年度もルールメイキングを継続実施する学校および新しいモデル校となる新規実証校の設定を検討

4.得られた成果

学校自走支援モデル開発：パートナー制度

全国
28校
※R4年2月末時点

学校参加
個人参加

- <九州エリア>
- ・熊本県立熊本農業高等学校
 - ・西都市立穂北中学校
 - ・中間市立中間東中学校
 - ・福岡女子商業高等学校
 - ・延岡市立岡富中学校

- <中国エリア>
- ・鳥取県立米子東高等学校

- <北信越エリア>
- ・小浜市立小浜中学校

- <北海道エリア>
- +個人参加2名

- <東北エリア>
- ・小野町立小野中学校
 - ・山形県立小国高等学校

- <関東エリア>
- ・かえつ有明中学高等学校
 - ・武蔵野市立境南小学校
 - ・筑波大学附属坂戸高等学校
 - ・成女高等学校
 - +個人参加5名

- <中部エリア>
- ・浜松学芸中学校高等学校
 - ・名古屋経済大市邨高等学校
 - ・愛知県立足助高等学校

- <関西エリア>
- ・高砂市立高砂中学校
 - ・兵庫県立西宮甲山高等学校
 - +個人参加3名

講師派遣制度の開始

学校の希望に応じて、
専門家の紹介・派遣を開始



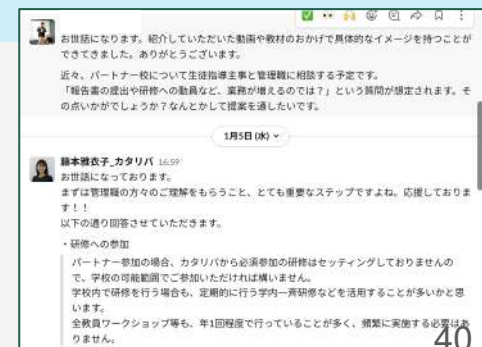
研修会・相談会・交流会の開催

月1回の頻度で
パートナー相談会・
研修を実施
※任意参加



相談チャットの開設

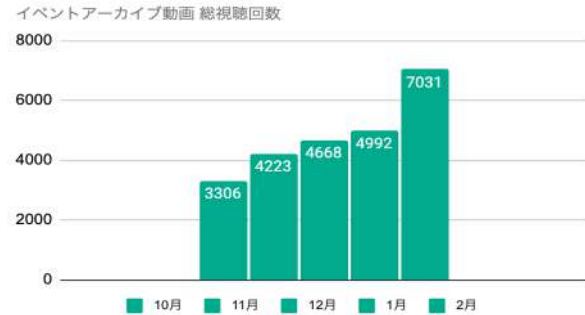
チャットツール「slack」を
用いて、パートナーからの
相談の受付を開始
※任意参加



4.得られた成果

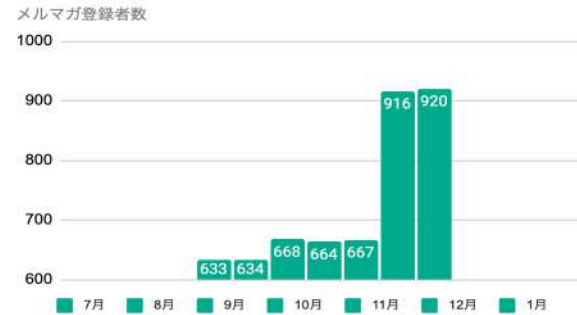
ムーブメントづくり：対話的ルールメイキングの認知獲得（SNS・メルマガ・WEBサイト）

各種SNS・メルマガ・WEBサイトにてルールメイキングの情報発信やイベント告知等、多岐にわたり認知拡大を目的とした発信活動を行ってきました。各メディアでインプレッション数(PV数・視聴回数)は伸びており、メルマガ登録者数も大規模なイベント実施により増加しています。



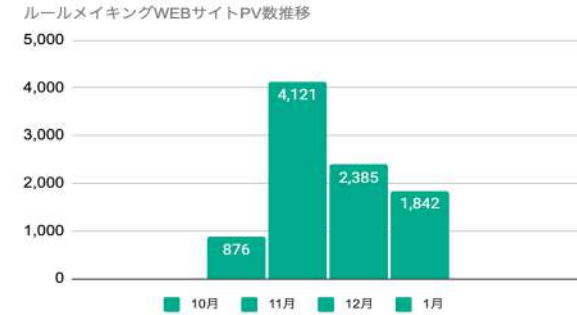
■ イベントアーカイブ動画 視聴回数

ルールメイキング宣言公開トークセッション等のオンラインイベントの様子をYouTubeにて公開し、総再生回数は242,220回に登る。イベント参加者層以外にも情報収集層の獲得に寄与している。



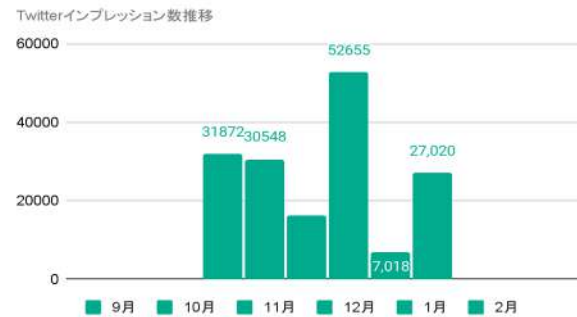
■ メルマガ登録者数

イベント参加者を中心にメルマガ登録者を増やし、現在920人の登録者数に登った。イベント告知等の他、校則見直しの注目ニュース等の配信を定期的実施している。



■ ルールメイキングWEBサイトPV数推移

ルールメイキングの刊行物やイベント告知などを中心に発信。パートナー登録導線強化などを行い、ルールメイキング発行のコンテンツを集約するなど、さらなる改善を図る。



■ Twitterインプレッション数推移

イベント告知やnote連載記事、ハッシュタグキャンペーン等を発信し、フォロワー200人達成し、月間平均28000インプレッションのアカウントに成長している。



■ note PV数推移

月2~3本程度の記事を更新し、月間平均2100PV、350フォロワーがいるアカウントに成長している。今後も連載企画などでより先生方に読まれるメディアとして活用していく。

4.得られた成果

ムーブメントづくり：対話的ルールメイキングの認知獲得（メディア掲載）

2021年7月～2022年2月まで合計46件メディアに掲載されました。新聞・WEBメディア等を中心に実証事業校の所在地域の地方メディアに向けたアプローチ等も行い、イベント集客・パートナー校獲得に向けた広報施策を行ってまいりました。

2021年7月 9件	2021年8月 2件	2021年9月 17件	2021年10月 5件	2021年11月 5件	2021年12月 2件	2022年1月 3件	2022年2月 3件
<ul style="list-style-type: none"> ●ICT教育ニュース ●EdTechZine ●教育新聞 ●中国新聞 ●日本教育新聞 ●Globaledu ●琉球新報 ●琉球新報DIGITAL等 	<ul style="list-style-type: none"> ●岐阜新聞WEB ●日テレNEWS24 	<ul style="list-style-type: none"> ●現代ビジネス ●NHK/クローズアップ現代+ ●福井新聞 ●日刊県民福井 ●中国新聞 ●exciteニュース ●BIGLOBEニュース ●EdTechメディア ●福島民報 ●先端教育 ●新潟ベンチャーキャピタル ●YOUTH TIME JAPAN ●時事.com 等 	<ul style="list-style-type: none"> ●読売テレビ ●朝日新聞ウィークリーAERA ●岐阜新聞WEB ●下野新聞 ●日本経済新聞等 	<ul style="list-style-type: none"> ●EdTechZine ●中国新聞 ●朝日新聞 ●NHKBS ●NHK「あさイチ」 	<ul style="list-style-type: none"> ●LAXIC ●あしたメディア 	<ul style="list-style-type: none"> ●下野新聞 ●長崎新聞 ●NHK広報局note 	<ul style="list-style-type: none"> ●47news ●愛媛新聞オンライン



▲NHK「クローズアップ現代+」



▲読売テレビ「かんさい情報ネットten.」



▲NHK「あさイチ」



▲岐阜新聞WEB

4.得られた成果

ムーブメントづくり：当事者の立場からの情報発信の増加—note社との連携

note株式会社のメディアプラットフォーム「note」にて校則に関する考え・アイデアを広く募った「#みらいの校則」投稿コンテストを開催。中高生向けの記事執筆イベント等を開催し、当事者である中高生の生の声を発信する取り組みも実施しました。約3ヶ月間で316件の投稿があり、投稿作品の総PV数は33,168PVという結果になりました。

#みらいの校則投稿数
2021年9月27日～12月31日(約3ヶ月間)
316件 (33,168PV)

コンテスト審査員の皆さま



■浅野大介さん



■若新雄純さん



■真下麻里子さん



■古川真愛さん

審査結果

グランプリ作品

審査員特別賞作品

※PC等の電子機器でPDFを開いている場合は作品画像押下で、作品にリンクします。



破る校則、生きる校則

♡ 51



とある学校の校則改革にNHKのディレクターが1年かけて参加してみます

♡ 377



たとえ校則が変わっても、わたしがズボンを履くことはありません。

♡ 518



「サッカーばかりしてきた私を変えたいと思った学校の現状。」

♡ 17



「生徒会でもない、ただの生徒の僕が校則改正に取り組む理由」

♡ 64

■前文

学校は、民主主義社会を支える、最も重要な土台となる場所です。

「自分たちの社会は自分たちでつくる」が民主主義社会の原則であるならば、学校もまた、「自分たちの学校は自分たちでつくる」機会を、生徒・教員・保護者などの関係当事者に十分に保障する必要があります。

我が国の教育基本法は、「平和で民主的な国家及び社会の形成者」を育むことを教育の目的としています。それはすなわち、他者の自由を認めることのできる、自由で自立した市民の育成です。

この教育の「最上位目的」を達成するためにこそ、私たちはルールメイキングに取り組めます。

ルールは、一人ひとりの自由や多様性を守り、認め合うために存在するものです。立場や価値観などを異にする人たちが、互いを尊重し、対話を重ね、納得解をつくり合っていく。そんな力を身につけることは、生徒がこの社会を生きていく上でも、きわめて重要なことであると私たちは信じています。

だからこそ、校則・ルールのもとで学校生活を送る生徒自身の参画機会を保障しながら、生徒はもちろん、教員や保護者や地域の方など関係する人たちが、校則・ルールについてともに対話し、見直し続けていくことを、私たちはここに宣言します。

■校則・ルールの制定や見直しを進めるうえで前提にしたい3つの原則

- ①一人ひとりの尊厳を大切に。 [個人の尊重]
- ②「そもそも何のための学校か」を最上位に。 [最上位目的との整合性]
- ③学校は校則を公開し、その制定・改廃への生徒の参画を保障する。
[公開原則と意見表明権の保障]

■校則・ルールの制定や見直しを進めるうえで大切にしたい9ヶ条

- 1 一人ひとりが安心して居られ、声に耳を傾け合える環境づくり [心理的安全性]
- 2 疑問をもった「私」からはじめる [発議の権利]
- 3 「なぜ、この校則・ルールが存在するのか」を確認する
[制定の根拠・背景の確認]
- 4 固定観念にとらわれない [前提の再考]
- 5 目的にかなう手段（校則・ルール）を論理的に提案する [目的合理性]
- 6 論点を明確にして、対話でみんなの納得解をつくる [対話的なルールづくり]
- 7 関係者が取り組みを見えるようにする [プロセスの可視化]
- 8 できた校則は公開する [情報の公開]
- 9 一度つくった校則・ルールを見直し続ける [継続性と改定手続きの制度化]

実施体制：事務局・サポーターによる運営

- 運営主体：事務局スタッフ・サポーター・CN
コンテンツ企画、当日運営、ファシリテーターは事務局とサポーター、CNが務めました。
- 参加者数：生徒62名・教員14名 (合計76名)
実証事業校の他、サポーター校の生徒教員や中高生メンバーも参加しました。

コンテンツ：対話レクチャー

- 主なコンテンツ：
 - ・対話レクチャー
古瀬正也さんを講師にお迎えし、「対話ってなんだろう？」をテーマにミニレクチャーを実施しました。
 - ・トピックトーク
事務局が事前に設定したトピックに分かれ、生徒同士が交流をしました。ファシリテーターはサポーターが務め、生徒の学びを深めることに重点を置きました。

参加者の声

自分が今まで対話だと思っていたものが、議論だったということに気が付きました。対話の本質を知ることができました。(実証事業校 生徒)

"生徒を巻き込む"ということに囚われがちでしたが、改めて本当に巻き込んでいく必要があるのか、何故巻き込みたのか、考える機会になりました。(中高生メンバー)

とても楽しかったです！新しいことを学ぶことができ、自分の考えを客観的にみることができるようになりました。(実証事業校 生徒)

実施体制：実行委員 (生徒) による運営

- 運営主体：事務局スタッフ・実行委員
実証事業校、中高生メンバーから実行委員を募り、生徒が企画から参加しました。
- 参加者数：生徒50名・教員8名 (合計58名)

コンテンツ：実行委員による話題提供

- 主なコンテンツ：
 - ・トピックトーク
取り上げるトピックは、実行委員生徒が話し合い決定し、ファシリテーターも生徒自身で行いました。
実証事業校の生徒が、パートナー校の生徒にアドバイスや事例共有をする様子がみられ、同世代での交流・学び合いの価値を感じられる会となりました。

参加者の声

自分の学校の校則は自分からしたら普通の事でも他校からしたら、ありえない事だったりして、普通と言うものが無いので、本当に自分達の意見で変えていく事が大切なのだと思えて感じられました。(実証事業校 生徒)

自分の学校と他の学校の校則の違いが知れて、自分の学校に取り入れてみたいと思う事が沢山あってすごく楽しかったです。(パートナー校 生徒)

校則を生徒と教師で考えるって、結局、学校が生徒や先生にとってどういう場になればいいのかとか、よりよい生徒と教師の関係を考えるということと一緒にすることで改めて思いました。(パートナー校 教員)

4.得られた成果

交流支援：実践者同士の主体的な交流機会への発展

■実証事業校によるオンライン交流

自由学園×新渡戸文化中学高等学校

日時：7月30日(金) 19:15~21:00、8月4日(水) 19:15~21:00、
8月19日(木) 19:15~21:00

全3回のオンライン交流・生徒活動を実施しました。互い学校の活動内容の共有や、両校のプロジェクトテーマである「幸せ」について意見を交換し、ルールメイキングに対して理解を深めました。

姉崎高等学校×足利清風高等学校

日時：8月10日(火) 9:00~10:00

担当教員・コーディネーターがオンラインで集まり、お互いの学校状況を踏まえ、校内でルールメイキングプロジェクトを進めるための意見交換会を実施いたしました。

大垣市立東中学校×泉大津市立小津中学校

日時：9月6日(月) 15:30~16:30

オンライン交流・生徒活動を実施しました。生徒同士の自己紹介やプロジェクトの進捗共有などを行いました。



◀ルールメイキング宣言づくり公開トークセッションで同回に登壇したことがきっかけとなり、生徒発信で交流会が実現しました。両校のルールメイキングのキーワード「幸せ」について意見交換をする活動を実施しました。

■ルールメイキングトークセッション@OSAKAの開催

内田良氏、真下麻里子氏、古田雄一氏をゲストに迎え、夕陽丘学園高校、小津中学校の先生・生徒とのトークセッションイベントを開催しました。Youtubeの生配信で約60名が視聴いただきました。アーカイブでの視聴者も増え、再生回数は1000回を超えました。



このイベントに向け、泉大津市立小津中学校・大阪夕陽丘学園高等学校・四條畷学園中学校3校による、交流イベントを10月28日から開始しました。さらに12月22日には、小津中が夕陽丘高校を訪問し、オフラインでの交流会を実施しました。

5. 調査研究による効果検証

KATARiBA
Shape the Future

(1) 目的

生徒が主体となって校則やルールの見直しに対話的に取り組む「ルールメイキングプロジェクト」の活動が生徒や学校にもたらす変化や要因について分析することを通じて、当該活動の価値や可能性を詳細に明らかにし、取り組みの広範な展開の材料とするとともに、課題を浮き彫りにすることで、今後の改善の参考とする。

(2) リサーチデザイン（研究課題、研究方法等）

→次頁以降を参照

(3) 研究チーム推進体制（※今回の報告の作成者についてはp.50を参照）

- ・統括：古田雄一（大阪国際大学短期大学部）
古野香織（カタリバ）・起塚拓志（カタリバ）

- ・推進：若手研究者・大学院生によるコアチーム

久保園梓（筑波大学）

村松灯（帝京大学）

大脇和志（筑波大学大学院）

渡部春香（北陸先端技術大学大学院）

上田秀麿（一橋大学大学院）

郡司日奈乃（千葉大学大学院）

神田颯（広島大学大学院）

村田一郎（広島大学大学院）

高見史織（広島大学大学院）

奥村尚（独立研究者）

リサーチクエスチョン（研究課題）		調査方法
①生徒の変化とその規定要因の検証	RQ1 ルールメイキングの活動を通じて、生徒にどのような学びや成長があるか？	■定量的方法+定性的方法 ・生徒の変化： ①全校生徒質問紙, ③コア生徒へのインタビュー ・活動の内容や質： ②参与観察, ④活動内容の自己評価と振り返り
	RQ2 活動の内容や質は、生徒の変化にどのように影響を与えるか？	
	RQ3 学校の諸条件によって、活動の質や生徒への効果は変わるか？	
②学校の変化とその規定要因の検証	RQ4 ルールメイキングの活動は、教員や学校にどのような変化をもたらすか？	■定性的方法 ③コーディネーターやコア教員へのインタビュー ④活動内容の自己評価と振り返り
	RQ5 活動を通じた教員や学校の変化は、どのような要因に規定されるか？	
③外部人材の効果と役割に関する検証	RQ6 コーディネーターや外部専門家の関与は、学校にどのような変化をもたらすのか？	■定性的方法 ②参与観察 ③コーディネーターやコア教員へのインタビュー
	RQ7 各学校で、コーディネーターの関わり方や役割にはどのような違いがあるか？	

調査方法および対象

方法	内容	時期	対象
①質問紙	校則に関する認識、効力感、学校風土などを調査する定量アンケート	事前・事後	全校生徒/全教職員
②参与観察	活動へ同席し、生徒や教員等の様子を活動記録におさめる	適宜	令和3年度実証校のうち8校 (安田女子中高・足利清風・姉崎・大垣東・四條畷・遊佐・夕陽丘学園・岡山)
③インタビュー	活動を通しての気づきに関する聞き取り	中間・事後	コア生徒・担当教員・CN
④活動内容の自己評価と振り返り	ルールメイキングの進め方に関する自己評価アンケート	事後	コア生徒・担当教員・CN

データ収集や分析に時間を要することから、次頁以降に記載する内容は、現時点で得られたデータに基づく途中経過の報告（速報）となります。

・分析対象とするデータ

- ・②参与観察に基づく観察記録（フィールドノート）（参与観察実施校のみ）
- ・③インタビューデータ（生徒・教員実施分、一部※）
- ・④活動内容の自己評価と振り返り（生徒記入分、一部※）

※…今回は、校則見直しの活動が早めに一段落し、インタビューや振り返りを早期に実施できた学校や、中間インタビューを実施できた学校のを主に用いている。

・今後の見通し

以下のすべての調査方法／データ

- ①質問紙（全校生徒・全教員）、
 - ②参与観察に基づく観察記録（フィールドノート）、
 - ③インタビューデータ（コア生徒・コア教員・コーディネーター）、
 - ④活動内容の自己評価と振り返り（コア生徒・コア教員・コーディネーター）
- に基づく完全な分析結果および考察については、別途次年度以降に公開予定。

・報告内容の担当について

今回の報告（p.51～57）については、事務局・研究統括の古田氏で作成した。

RQ1：ルールメイキングの活動を通じて、生徒にはどのような学びや成長があるか？（コア生徒、全校生徒）

●**変化①** 意見を表明することに自信を持ち、伝えることの重要性を認識するようになっている

プロジェクト序盤では「自分の意見を伝えることに自信が持てない」と感じていた生徒が、徐々に意見を伝えられるようになったという語りが見られた。

最初のほうって全然自信がなくて、こう、自分の意見はあっても言ったら否定されるやろなっていうのがあったんですけど、言ってみたら、「あ、それええやん」って言ってもらえることが、けっこう多くて、やってみる、言ってみる、って大切なんやなって思った（実証事業校のコア生徒への中間インタビューより）

●**変化②** 考えや価値観の異なる他者の意見について、傾聴の姿勢が生まれ、主張の背景について理解しようとしている

自分と異なる意見に対して否定的な態度をとっていた生徒が、相手の意見を一度受け止め、背景を理解することの重要性を認識したという語りが見られた。

今までやったら、「でも…」とか、なんていうんですか、その人の意見に、反対してしまいたいんですよ。なんていうんですか、違ったら、なんていうか、「でも違うでしょ」みたいな感じで。でも、このプロジェクトをするにあたって、「でも…」とかじゃなくて、なんていうんですか、「あ、そうなんですね」っていう、受け止めるっていうことを、一つ学んだかなっていうのがありました。（実証事業校のコア生徒への中間インタビューより）

●**変化③** 学校の校則・ルールを見直すプロセスによって、「自分たちの学校（＝社会）は、自分たちで変えられる」という認識や効力感が形成されている

ルールメイキングの経験によって、自ら動けば「自分たちの環境は変えていくことができる」という効力感に繋がったという語りが見られた。

- ・自分達で学校をより良い方向へ変えていく事ができるんだということを感じました。（実証事業校のコア生徒の振り返りシートより）
- ・もしルールメイキングプロジェクトに自分が参加していなかったら、自分達で動けば少しでも学校は変えられる！という実感を持てなかったと思う（実証事業校のコア生徒の振り返りシートより）

●**変化④** 対話における「関係性づくり」や「環境づくり」を意識するようになっている

立場や価値観によって対立が生まれやすいテーマだからこそ、「対話における関係性づくり・環境づくり」の重要性を認識したという語りが見られた。

課題に直面することの方が多くて、順風満帆に進むことの方が少なかったけど、だからこそあきらめずに粘り強く試行錯誤してゆくことが自分にとっては良い経験になったと思う。大人相手でも恐れなくて対等な会話をするのがこれからもできるといいなと思う。（実証事業校のコア生徒の振り返りシートより）

5.調査研究による効果検証

①生徒の変化とその規定要因の検証（RQ1・2・3）

RQ2：活動の内容や質（例：全校生徒の参加、透明性や可視化の担保、多様な意見の聴取、十分な時間の確保、外部専門家の助言や関与、…）は、生徒の変化にどのように影響を与えるか？ →RQ1で見たような変化が、どのような活動内容によって作られるのか

ルールメイキング活動のステージと、それに伴い生まれやすい生徒の変化（仮説的な枠組み）

ステージ	主な活動	生徒の変化
活動序盤	CN・先生とのキックオフ／対話ワークショップ	CNの関わりによる変化（新たな場の経験）、対話の経験による変化
活動中盤	全校生徒・先生・地域・保護者・企業などへの聞き取り調査	調査の活動による、生徒主体で徐々に動き出すことによる変化
活動終盤	提案書の作成／先生への提案会／新ルールの試行・周知	校則が変わる／変えることによる変化

●《活動序盤》の変化の例（先生・CNとの対話の場を経験した生徒）

対話の場において、安心して意見を受け止め合える経験をしたことで、立場や意見が異なる相手に対しても臆せず自分の意見を伝えられるようになっている。

自分が学んだのは、対話の大切さで。校則とかになってしまったら、先生に「え、なんでこうなん？」とか「これも良いんだからこれも良いんじゃないの」って結構攻撃的になったりすることがあったんですけど、一回先生方の言ったことも受け止めながら「じゃあこうなんじゃない」とか「あ、なるほど」って受け止めることで先生も味方になってくれるし、いろんなアドバイスを頂けることを知りました。（実証事業校のコア生徒への中間インタビュー記録より）

ルールメイキングプロジェクトを通して、自分よりすごい発言力のある人とか、自分はこう思うんだっていう誰とも違う強い意志を持って、しかも自分に自信を持って発言できる人がすごい多くて、なんで自分って「こんなに自分だけの意志がないんだろう」って思うときもあるんですけど、絶対に自分にしかない意見とか、衝突とかして「いや、自分はこう思う」っていう時もあると思うから、自分に自信を持って発言する力って大事だなって思いました。…自分らのグループでも発言頑張ろうと思って、●●先生とかすごい怖かったんだけど、（見直したい校則の内容）のこと言ったら急に否定モードに入ってきて、今までは「ああそうですね」って言ってたんですけど、その時は頑張って「私はこう思います」って言いました。（実証事業校のコア生徒への中間インタビュー記録より）

RQ3：学校の諸条件（例：公立／私立、地域性、学校規模、学校風土や教職員の関係性、校則の厳しさ）によって、活動の質や生徒への効果は変わるか？

諸条件	考察
生徒像のイメージ	考察：私立伝統校でのルールメイキングでは、活動の上で「●●校生らしさとは何か」が大きな判断軸となる どの学校でも、生徒・教員双方がもつ生徒像のイメージから「●●校生らしさ」が取り上げられるが、めざす生徒像がブランド価値として確立しているような学校では、とくにその傾向が強い
学校目標	考察：学校の目標が関係者に広く共有されている場合、校則・ルールを見直しのプロセスにおいて判断材料として機能する 学校の目標（育てたい生徒像や学校経営方針等）が関係者に周知されており、達成したい目標として意識されている場合、校則改定案を作成する際の上位目標として生徒・教員から繰り返し参照される傾向にある
校則・指導の厳しさ	考察：もともとの校則・指導の厳しさは、ルールメイキング活動の直接的な障壁とならない 生徒指導への不安がつよい学校では活動に対するコンセンサスが得られにくくなるものの、校則の厳しさが関係者の主体性や課題意識を強める側面があり、必ずしもマイナスにならない
進路傾向	考察：学校の進路の傾向がルールメイキング活動で重視される内容に反映される 校則・ルールを改定することについて、進路実現における悪影響（進学／就職面接で不利にならないか）がしばしば懸念されるが、卒業後にそのまま就職する生徒が多い学校では、その傾向が現れやすい。
保護者	考察：保護者の反応は、校内でのルールメイキングの推進力に影響する 保護者によって、現状の校則や生徒指導のあり方に対する疑問・不満の声が届けられることにより、校内におけるルールメイキングの取り組みの必要性・重要性が高まる
地域	考察：地域からの反応は、校内でのルールメイキングの推進力に影響する 地域の関係者（住民や企業等）からルールメイキングに対して肯定的な反応が得られると、取り組みに対して生徒や教員が前向きな意義を見出しやすい

RQ4：ルールメイキングの活動は、教員や学校にどのような変化をもたらすか？

※研究方法に関する補足：報告書作成時点（2月中旬）においては、プロジェクト活動が終了した一部の学校の生徒にのみ、①全校生徒アンケート・②聞き取り調査・④活動内容の自己評価が完了しており、2月時点でプロジェクトが継続しているその他の学校については、②年間を通じた参与観察のデータを中心に考察している。研究方法①～④を用いた分析結果および考察については、別途次年度以降に公開予定。

■教師—生徒間の関係

- ・生徒の主体性を信じ、任せることへの期待の高まり

教員「このプロジェクトが始まった当初、校則を”ゆるめる”ということは全く考えていなかったし、それが学校のあるべき姿だと思っていましたが、プロジェクトが経過していくうちに、生徒たちの主語が”自分は”から”みんなは”に変わっていき、みんなのが納得のいく着地点を導き出そうと対話している姿みて、自分自身も考えが変わっていきました」

- ・生徒と教員間の認識のズレの相互理解

教員「こないだのMTGをみていて、その、教員が示しているルールとその、なんていうのか、生徒の解釈が違っていたりみたいなことは結構あるなと感じたんですけど、そういうところの整理ができるといいなと思った」
「去年と一昨年で生徒会経験をしてきている子もおると思うんですけど、反省じゃないですけど、ここまでいろいろ話できてなかったな。こういう角度から意見を聞くことはなかったなと思います。」

- ・生徒への関わり方の変化

教員「今回（ルールメイキング）は一緒に学ぼうね、一緒に話を聞こうね、一緒に考えていこうね、やっといこうねっていう、なんか教科指導の立場を超えて、縦の関係というよりか横の関係というスタンスで、前半は特にそうだと思います。後半はですね、前期力をつけた生徒がたくさんいましたので、そこをお願いする、その子たちが中心となって後期のメンバーを動かしていく、後半は見届けと思って進めてきました。」

■教員間の関係

- ・お互いの教育観について交わし合える雰囲気醸成

教員「職員の中でもルールメイキングじゃないですけど、タブレットの使い方を学級活動で話し合わせてみよか！とか校則の改正活動をタブレットでまねてみたり、自主的な活動を仕組まれる職員も多いので、こういうのが雰囲気として変わったところかなと思いますね。」

教員「職員室の雰囲気が変わった。ルールメイキングに関する話題が増えたと感じます」

RQ5：活動を通じた教員や学校の変化は、どのような要因に規定されるか？

※研究方法に関する補足：報告書作成時点（2月中旬）においては、プロジェクト活動が終了した一部の学校の生徒にのみ、①全校生徒アンケート・②聞き取り調査・④活動内容の自己評価が完了しており、2月時点でプロジェクトが継続しているその他の学校については、②年間を通じた参与観察のデータを中心に考察している。研究方法①～④を用いた分析結果および考察については、別途次年度以降に公開予定。

■要因1 生徒の変化を目にすることによる内省

教員「『先生がアシストしてるだけでは』っていう見方って結構あったが、実際に生徒が仕切ったりとか、意見を述べてるっていう姿を見て、『あ、ほんまに生徒がやってるんだ』っていうのを思って、『すごいな』っていうふうなことを言ってくれたり、『ここまで生徒ってできる力もってるんだ』っていうところを改めて分かってもらった」

教員「我々も学校の校則って言うところで、頼っているところがあるんですよ、それは学校の安全とか安心とか、そのあたりを崩れないようにするために、っていう考えから、けど、それってなくても学校成り立っていく、前から見れば緩くなった、でも学校生活の影響ないですよ。っていうの中で自分の中で変わったというのが一つ。」

■要因2 校則検討の後ろ盾となる管理職の存在

教員「僕一人で進めるのはしんどいですね。その理由は、校則改正を納得していくには、内部だけでは苦しいところがある。第三者の力を借りて、っていうのが必要。学校長が近いところでやっていて進めやすかった。」

■要因3 学校の中にある問題に気づく瞬間

教員「『先生に従いなさい』みたいな、『先生の言うことを聞いてりゃいいんだ』みたいな、そういう指導をしてきたからこそ今の生徒なんだっていうのを、このプロジェクトをやり始めて気づいたんですね。これじゃいかんっていうのを。なるほど、そういうことかと思って。」

RQ6：コーディネーターや外部専門家の関与は、学校にどのような変化をもたらすのか？

※研究方法に関する補足：報告書作成時点（2月中旬）においては、プロジェクト活動が終了した一部の学校の生徒にのみ、①全校生徒アンケート・②聞き取り調査・④活動内容の自己評価が完了しており、2月時点でプロジェクトが継続しているその他の学校については、②年間を通じた参与観察のデータを中心に考察している。研究方法①～④を用いた分析結果および考察については、別途次年度以降に公開予定。

■コーディネーターの関わり

・本音を言いやすい環境づくり

生徒「ちょっとこの学校って外部からの印象に気を遣うっていうか、そういう傾向あるかなと思っていて。教師がおる場でいうことじゃないんかもしれないんですけど」

・教員の心理的安全性

教員「自分は職員室の中で、変わっていると思われるかもしれない。だからこそ、カタリバ、コーディネーターの存在意義は大きい。ここがスタートだと思って、前を向いて取り組んでいきたい。また管理職の理解があるということも大きい。校長と指導部長、外部スタッフの方も支援してくれている。担当の教師が孤立化しなくて済んでいるのはありがたい。」

■メディアの関わり

・ルールメイキングの取り組みに対するポジティブな認識の醸成

事例：取り組みがメディアで取り上げられた後は、「今朝の職員室では、あちこちで話が聞こえてきました。」「少しずつですが教師たちの意識改革ができてるかなと感じます。全員にはまだほど遠いかもしれませんが。」などといった反応が聞かれた。

■地域住民の関わり

・活動に対する外部からの意義づけ、外部からの応援による教員側の認識変化

生徒「地域の方から『やってみたらいいんじゃない？』と言われて、見守ってくれていることを感じた。変えてもいいんだと思うきっかけになった」

RQ7：各学校で、コーディネーターの関わり方や役割にはどのような違いがあるか？

※研究方法に関する補足：報告書作成時点（2月中旬）においては、プロジェクト活動が終了した一部の学校の生徒にのみ、①全校生徒アンケート・②聞き取り調査・④活動内容の自己評価が完了しており、2月時点でプロジェクトが継続しているその他の学校については、②年間を通じた参与観察のデータを中心に考察している。研究方法①～④を用いた分析結果および考察については、別途次年度以降に公開予定。

■サマリ：

コーディネーターが果たしていた役割に各校でおおむね共通であり、対話のサポートや外部リソースとの接続等が主なものであった。また、コーディネーター自身が持っている専門性や個人的な繋がりにより、それぞれの実践において関わり方の特徴がみられた。

■コーディネーターの役割：

- ・本音の対話機会の確保(生徒の対話活動／教員研修等)
- ・多様な校則を見直し対象とする働きかけ
- ・外部リソースとの接続
- ・プロジェクトマネジメント（スケジュール管理）

■コーディネーターの属性と関わり方の特徴（例）

属性	関わり方の特徴
メディア関係者	・ルールメイキングの取り組みについて校内で発信をすることに対する具体的なアドバイス
ユースセンター職員（学校所在エリア）	・ユースセンターが立地するエリアでの繋がりを活かし、外部との接続を積極的に実施
教育コンサルタント（保護者）	・ルールメイキングの意義について、教員に対して保護者の視点からサポート
教育寮スタッフ（地域おこし協力隊）	・活動に毎回現地参加し、活動内容の設計やファシリテーション
民間企業（企画職PM）	・学校にとっての第三者の立場を明確にし、担当教員への提案を積極的に実施
担当校OB	・卒業生の立場を生かして、教員間での合意形成や取り組みへの深い理解を引き出す

2021年度

2022年度

学校関係者や広く
社会全体に向けたもの

書籍化、イベントなど

- 主権者教育系のフォーラムにて事例報告
日本シティズンシップ教育フォーラム
シティズンシップ教育研究大会2021
題名：「生徒参加による校則・ルール見直しの
活動序盤にみる意義と課題」

- ルールメイキング関係書籍の出版
時期：2022年度 夏ごろ

研究者コミュニティに
向けたもの

学会発表、論文化など

- 論文化：
 - ・古田雄一氏（研究統括）
「（生徒参加による対話的な校則見直しの市民性
教育効果と課題—安田女子中学高等学校「ルー
ルメイキングプロジェクト」の事例から—」
- 大学研究室主催のフォーラムで事例報告
広島大学 社会認識教育学研究室主催
「生徒による校則づくり×社会科授業」

- 2021年度 研究最終報告書の作成
- 学会報告
（例：日本教育学会、日本公民教育学会、
日本教育経営学会 など）

6. まとめ・今後に向けた示唆

KATARiBA
Shape the Future

各校の実践のなかで、ルールメイキング活動が進展し、深まる転機となる場面がみられた。そういった場面はいずれも「ルールメイキング宣言」の原理・原則にもとづく実践となっていた。

	要素	関連する原理・原則 (みんなのルールメイキング宣言)	事例
学校全体の取り組みとして浸透するきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ①学校づくりの方針との親和性 ②教育課程全体で行われる対話的な実践(学校風土) ③管理職教員の関与 	<ul style="list-style-type: none"> ●ルールメイキング宣言 (原則1)一人ひとりの尊厳を大切に【個人の尊重】 (原則2)「そもそも何のための学校か」を最上位に【最上位目標との整合性】 	<p>事例①：中学校区の「みんなが安心 みんなで創る あなたが輝く学校」という共通目標の中にルールメイキングが有機的に位置付けられており、取り組みに対する教員の納得度が高い</p> <p>事例②：学校全体で、授業に対話的活動を積極的に取り入れている。生徒のコミュニケーション活動への抵抗感がなく、校則見直しに関する議論が活性化した。</p> <p>事例③：校長が毎回のルールメイキング活動に参加し、生徒の様子を見守りながら、担当教員を後押しした。</p>
生徒の対話姿勢・成長	<ul style="list-style-type: none"> ①対話の姿勢が生徒から示される ②最上位目標の尊重 ③生徒の成長による教員の認識変化 	<ul style="list-style-type: none"> ●ルールメイキング宣言 (原則2)「そもそも何のための学校か」を最上位に【最上位目標との整合性】 (原則3)学校は校則を公開し、その制定・改廃への生徒の参画を保障する【公開原則と意見表明権の保障】 	<p>事例①：生徒から教員に対して対話会が呼びかけられた。場づくりのキーワードとして「対立ではなく対話」が掲げられ、対話的な空間形成を生徒が主導した。</p> <p>事例②：校則の改定案検討において、建学の精神である「自律した生徒」という要素を念頭におきながら案を練り、教員側へ提案する姿がみられた。</p> <p>事例③：対話をリードする姿など、生徒の成長を感じる機会に出会うと、教員から生徒への信頼感が向上する</p>
教員による本音の開示	<ul style="list-style-type: none"> ①教員間での本音の開示 	<ul style="list-style-type: none"> ●ルールメイキング宣言(第4条) 固定観念にとらわれない【前提の再考】 	<p>事例①：担当教員の悩みや葛藤がメディアで発信された。それにより学校内外の関係者(教員・生徒・保護者等)が担当の立場を理解し、両者の関係が良化した。</p>

6.まとめ・示唆

本質的な取り組みになるためのキーポイント：取り組みの難しさが浮き彫りになった場面

各校の取り組みのなかで、ルールメイキング活動が停滞する場面もみられた。

それぞれのケースで要因は異なるが、ルールメイキングの原理・原則の何らかの要素が見落とされている場合が多い。

	要因	見落とされている原理・原則 (みんなのルールメイキング宣言)	事例
生徒が校則見直しの必要感を維持するのが難しい	<ul style="list-style-type: none">①特定の立場・意見の過度な一般化②既存の指導方針への無批判な納得	<ul style="list-style-type: none">●ルールメイキング宣言 (第4条) 固定観念にとらわれない 【前提の再考】	<ul style="list-style-type: none">①生徒：「社会に出たら決まりを守らなければならないと聞いたから、学校のルールは変えるべきではないと思った。」②生徒：「先生は私たちのことを考えてルールを作ってくれているのだから、変えるべきではない。」 <p>外部への調査や聞き取りなど、多様な他者からの意見を集める段階で起こりやすい。</p>
校則見直し過程における論理性が担保されない	<ul style="list-style-type: none">①主観や経験則のみに基づいた社会規範の定義②論理的合理性を欠いた反対意見の提示	<ul style="list-style-type: none">●ルールメイキング宣言 (第5条) 目的にかなう校則を合理的に提案する【目的合理性】(第6条) 論点を明確にして、対話でみんなの納得解をつくる 【対話的なルールづくり】	<ul style="list-style-type: none">①教員：「男子がスカートを履くことは社会では認められていないのだから、学校でも認められない。」②教員：「お菓子の持ち込みをOKにしたら、3食お菓子で食事をする生徒が出るのではないか？」 <p>改定案の提案段階など、活動の終盤で起こりやすい。 ※生徒側の議論が最上位目標等を意識したものであっても、最終段階で覆されてしまうことがある。</p>
関係者の参加意識が醸成されておらず、改正案が認められない	<ul style="list-style-type: none">①見直しの過程に参加していない教員からの個人的な反対②改正案策定までの手続きの民主性に対する懐疑	<ul style="list-style-type: none">●ルールメイキング (第7条) 関係者が取り組みを見えるようにする【プロセスの可視化】	<ul style="list-style-type: none">①教員：「(改定案が承認された後に)自分の担当学年では改正案を受け付けない。これまで通りの指導を行いたい。」②教員：「改正案作成に生徒の巻き込みが足りていないのではないか。本当に生徒が望んでいるか証明されていない。」 <p>改定案の提案段階など、活動の終盤で起こりやすい。</p>

ルールメイキングの活動が停滞するシーンでは、何らかの理由で生徒や教員の思考や、議論が止まってしまう傾向がみられた。そのような場面では、活動を支援する教員や第三者から以下のような問いかけが望まれる。

事例（前ページ再掲）

解決の方向性・問いかけ

生徒が校則見直しの必要感を維持するのが難しい

①生徒：「社会に出たら決まりを守らなければならないと聞いたから、学校のルールは変えるべきではないと思った。」

②生徒：「先生は私たちのことを考えてルールを作ってくれているのだから、変えるべきではない。」

外部への調査や聞き取りなど、多様な他者からの意見を集める段階で起こりやすい。

■複数の視点を意識させる
「その意見もたくさんある中のひとつでしかないから、それがすべてだと決めつけずに、他の立場の声も聞いてみたらどうだろう？」

■目的にかなうルールかどうかを意識させる
「今のルールは、このルールの目的に当てはまっているだろうか？」

■ルールをとりまく現状を再考する
「ルールができたときと今では状況が違うかもしれないから、すでにあるルールが絶対に正しいとは限らないのでは？」
「先生が必要と考えるルールが本当に今の生徒たちに求められているとは限らないから、みんなの意見をまとめてみてはどうだろう？」

校則見直し過程における論理性が担保されない

①教員：「男子がスカートを履くことは社会では認められていないのだから、学校でも認められない。」

②教員：「お菓子の持ち込みをOKにしたら、3食お菓子で食事をする生徒が出るのではないか？」

改定案の提案段階など、活動の終盤で起こりやすい。
※生徒側の議論が最上位目標等を意識したものであっても、最終段階で覆されてしまうことがある。

■意見の根拠を問う
「どうしてそう考えるのですか？」

■意見の客観性を問う
「裏付けになる情報は何かありますか？」

■他者からの意見を促す
「今の意見について、他のみなさんはどう思いますか？」

関係者の参加意識が醸成されておらず、改正案が認められない

①教員：「（改定案が承認された後に）自分の担当学年では改正案を受け付けない。これまで通りの指導を行いたい。」

改定案の提案段階など、活動の終盤で起こりやすい。

■検討の手続きを正当なものにする
・教員全体から意見収集をする場をもつなどし、プロセスについて意見表明ができる機会を担保する

■納得感が得られてない部分を明確にする
「これまでの進め方で納得がいかない部分を教えていただけませんか？」

■手続きの正当性を確認する
「全体が合意しているプロセスにのっとったものではありませんか？」

ルールメイキングを広く展開していくための戦略として、(a) 裾野を広げる (b) ルールメイキングを探究する の2つの方向性を設定する。主体性を育む教育プログラムとしての「ルールメイキング」の認知を広げるとともに、取り組み自体をより深く本質的なものにしていくことで、ルールメイキングを学校現場に根付かせることを目指す。

(a) 裾野を広げる	(b) ルールメイキングを探究する
<ul style="list-style-type: none"> ■ルールメイキングは校則の改変にとどまるものではなく、生徒の主体性や資質・能力を取り組む教育プログラムとして活用できるという認識を広げる動き 	<ul style="list-style-type: none"> ■あらゆる学校でルールメイキングに着手し、進めていくことができる状態にするための動き ■学校ごとのルールメイキングをより深く本質的な取り組みに変化させていくための動き
<p><u>「裾野を広げる」上で課題になること</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ルールメイキングという概念や言葉が教育界に普及していないこと。 ■ルールメイキングが主体性を育てる手段として認識されていないこと。 	<p><u>「ルールメイキングを探究する」上で課題になること</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ルールメイキング推進のノウハウ不足 ■学校にとっての第三者になりうる専門人材の不足